
小学1年生の息子が、家を出た瞬間25歳の立派な勇者になって帰ってきた。

むう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小学1年生の息子が、家を出た瞬間25歳の立派な勇者になって帰ってきた。

【Nコード】

N1109X

【作者名】

むう

【あらすじ】

夫をはやくになくし、愛しい息子を育てるためだけに、わたしは毎日必死で働いていた。

そんな生活が板に付いてきた24歳のある日、小学1年生の息子が家をでた瞬間に玄関にあらわれたのは、異世界に飛ばされて立派な勇者になって帰ってきた25歳の息子だった。

未亡人のシンデレラストーリー。

※これは、前に掲載した短編を長編にしたものです。短編のイメー

ジをそんなう場合もございますことをござ承く下さい。

序章（前書き）

短編を少々加筆しております。

序章

息子の健祐は、わたしが18歳のときに生んだ子どもだ。

世間一般的に言うところ、その年で子どもができるなんてとんでもない部類に入るだろう。

別に健祐の父である男は、別におちゃらけた人間でも、楽観的な人間でもなかった。

わたしに子どもができると知ると、研究員になりたいという夢を、大学院進学を諦めて就職への道を歩んでくれたぐらい、真剣に考えてくれた。

堅実で、真面目で、誠実なひとだった。

高校生であるわたしに子どもができたと思った親は、当たり前の大反対。

頭が固い親だったのでわかってはいたが、その時にはわたしも彼も心を決めていて、生むことを決めていた。

彼の両親もそうだったらしく、わたしは駆け落ち同然で通っていた高校を中退し、彼と一緒に暮らしはじめて、健祐を生んだ。

未成年だったから結婚もすることもできず、彼とふたりだけでこっそりと結婚式をしたことは今でもはつきりと思い出せる。

10畳しかないワンルームのボロいアパートの中で、一本だけロウソクを灯して、ベールを真似た白いハンカチを頭にかけて、安っぽなお揃いの指輪を交換して……。

それから、誓いキスをした。

いまでも、わたしの左薬指には銀色にその指輪が光っている。

それから健祐が生まれて、誰も手助けしてくれるひとのいない状態で四苦八苦子育てをして、夜遅くまで仕事をしている彼の帰りを待って……。

大変だったけど、幸せだったのだ。

だった、と過去形なのにはもちろん理由がある。

健祐が生まれて3年。彼は車の事故にあって死んでしまった。

ひき逃げで、犯人はだれかわからなかった。

それからわたしは、毎日が必死だった。

遺族年金は受けていたが、とうてい足りない。

生活保護を受けようにも、勘当状態のわたしにはどうにもこうにも受けられない。

だから、働いた。

いまさら正社員になるにも厳しいから、パートをいくつも掛け持ちしながら子育てをした。

生きるために働いて、子どもを施設に預けるために働いて、これからの子どものための資金を溜めるために働いて、いろいろなものを犠牲にしながら、それでも子どものためにがんばった。

だから、それが起きたのはようやく子どもが小学校へ通うようになって、少しでも余裕ができた矢先のことだった。

そして、これからの息子が成長するのを楽しみに待っていた時期のことでもあった。

「おかあさん、いってきまーす」

「いってらっしゃい」

真新しい黒のランドセルを背負って、輝かしいばかりの笑顔で家をでる息子。

昨日夜遅くまで働いていたわたしは、これからパートの出勤があって、疲れていたし、げんなりしていたが、元気な健祐の笑顔を見たらそんなものは吹っ飛んだ。

玄関が閉まる音が聞こえ、わたしは意気込んで、使った食器を片づけようと腕まくりをしたときだ。

がちや。

いまさっき閉じられたばかりの玄関が、また開く音が聞こえてきた。

「……健祐ー、忘れ物ー？」

首をかしげて、ああ、リコーダーでも忘れたのかなと思い、玄関へ向かった。

でも、そこにいたのは――。

「ただいま、母さん」

そこにいたのは、日本ではありえないコスプレと思われる格好をした、やけにさわやかな顔立ちをした青年だった。

「母さん、ただいま」

もう一度、その青年はわたしにほほえみかける。

言っている意味がわからなくて、わたしは口を間拔けに半開きにして突っ立ったままであつたが、ようやくそこで意識を現実に取り戻した。

「あの……家を間違えていませんか？」

しかもその青年は、わたしと同じぐらいの年齢。ちなみにわたしは24歳。

いくら子持ちでも、どう考えてもこの年齢の息子はわたしにはいない。ありえない。

しかし、青年はなつかしさを顔いっぱい浮かべてわたしに抱きついた。

「……ちょ、あのっ！ ……えっ!？」

いきなりの抱擁に、わたしの思考は停止した。

でも、青年はおかまいなしに抱きつく力を強める。

「母さん……母さんっ！ 会いたかった……っ！」

わたしの肩に顔をうずめて、泣き始める。

それが、まるでしばらく会えなかった肉親にようやく会えた感動の再会をよろこぶ息子のようだと考え、人違いとはいえ、少しだけ同情して頭を撫でてやる。

そうすると、いっそうわたしを抱きしめる力を強めて青年は泣いた。

「母さん……」

「……とりあえずその母さんってやめてもらえませんか？ わたしには確かに息子はいますけど、そんな大きい息子を持った覚えはありません」

「いや……オレだよ、母さん」

オレって……今流行のオレオレ詐欺？

パート先のおしゃべり好きなおばさんが「あんたしかいないんだから、気をつけなさいよ!」と注意されたことを思い出した。

そうか、今時のオレオレ詐欺はひとの同情心を利用してお金をせしめるのだな、と妙に納得して、わたしは青年の両肩に手を置いて、

背の高い青年を真っ直ぐにみつめた。

「うちにはお金はありません」

「母さん、なにをいつてるの……!？」

「え、オレオレ詐欺じゃないの？」

「まだ一回しかオレって言ってないのに決めつけるのはよくないよ、母さん。今更だけど、思いこみの激しい性格だったよね、母さんって」

「……なぜそれを!？」

ごく親しい友人の間しか知れ渡っていない情報をなぜこの青年は知っているのだろうか。

この詐欺師はそうとうこの家について調べていたに違いない。

なにか間違っている思いこみを治すことなく、わたしは青年に疑いの眼差しを向けたまま、何が狙いなのだろうと考える。

「でもウチには値打ちのあるものはなにひとつ……」

「とりあえず、詐欺じゃないからね。落ち着こうよ、母さん。——健祐だよ」

「はい？」

青年がなにを言ったのか理解できなくて、わたしは聞き返していた。

「いや、だって健祐はいまさっき学校に行ったばかりですけど……」

「本当なんだよ、母さん。——これ、みて」

そういつて、青年は右手薬指にはめてある指輪をわたしに見せた。古びていて、それでいて安っぽい銀色のシンプルな指輪。

それは——。

「あのひとの……」

だいぶ古びてはいたが、確かにそれはわたしが彼と交わした、結婚指輪。

わたしの左薬指にも、同じものがはめられている。

それは、遺品として息子の健祐に渡していたはずのものだった。

「母さん」

もう一度、青年はわたしをまっすぐに見つめて、わたしのことをそう呼んだ。

「……健祐なんだよ、母さん。——会いたかった」

そういつて、再びわたしを抱きしめた。

わたしの愛したひとと、愛する息子の面影を残した青年が。

☆☆☆☆☆☆☆☆

あのとき息子の健祐は、ファンタジー小説などである『異世界』というものへ飛ばされたらしい。

そこでは魔王を倒すために勇者としてあがめられた息子は、魔王を倒すべく日々訓練に励みつつ、元の世界に帰る方法を探していたという。

それから19年の月日が流れ、ようやく魔王を倒し、おまけに王国の王女と恋仲になったという。

自分より年上の息子と認識したときもそうだったが、自分と同年ぐらいの女性を紹介されたときは、失神しそうになった。

魔王の遺産で元の世界に変える方法も見つけ、いざ元の世界に帰ろうとした息子だがそのときには王女様と共に生きることを誓っていたらしく、どうしようと相当悩んだらしい。

けれど、親友の王子様に「あちらでの生活が厳しいなら、こちらに来て一緒に暮らせば良い。これからなくした時間を取り戻せば良いよ」という励ましの言葉に背中を押され、帰ってきたという。

ご都合主義だとは思うが、あちらとこちらでは時間の流れがまっ

たく違うらしく、19年という歳月はこちらのほんの一瞬。

母の姿は全く変わっていないく、むしろ母親の年齢を通り越してしまった状態で再会することとなったそうだ。

あまりにも現実離れした事態に、啞然としていたら「どうせ時間の流れは違うから、一週間ぐらいのんびりしてみて」という言葉に知らず知らずのうちに頷いていたらしく、気がついたらわたしは、異世界の大王国。シンフォニウス王国の王城で立派な一室を与えられて暮らしていた。

突然、人生のやりがいも目標も無くしたわたしは、ただぼうっと部屋の中で日々を過ごしていた。

最初は一週間だったが、なにもしないうちに二週間、三週間が過ぎていく。

息子は忙しいながらも毎日部屋に来てくれたが、気が晴れない。娘という立場になる女性が来てくれる日もあったが、受け入れる懐はいまのわたしにはなかった。

居心地の悪い夢の中にいるような日々を、おくっていた。

結婚指輪を指でなぞりながら、なにも考えずに窓の外をみていたある日のときだった。

ノックの音が廊下から聞こえ、返事をするとなつた健祐が入室してきた。

彼は、最初会ったときの服装とは違い、白いシャツにベスト、ズボンというこの城内では非情にラフな格好をしている。腰には金色の彫刻とこの国の紋章が刻まれたひとふりの剣が鞘に収まってあって、重そうな鈍い音を立てている。そんな息子の出で立ち、顔立ちは同じ日本人なのに別の世界の人間のようなようだ。

健祐は少し困ったように笑って、わたしに手をさしのぼす。

「母さん、毎日部屋にいるだけじゃあ身体に悪いから散歩でもしようよ」

「……そうね」

自分より大きな息子の手が、家事や仕事でボロボロになったわたしの手をつかむ。

木の香りがする見事な彫刻のイスから立ち上がり、ふわふわとした高級感あふれる赤いカーペットの上を歩く。

久しぶりに部屋からでると広い廊下にでて、周りには召使いたちが忙しそうに掃除をしたり仕事に専念をしている。

ときおりチラチラと好奇心をはらむ視線をかんじて、思わずうつむいた。

視界には立派な大理石に廊下しか映らない。

息子の暖かい手の温度だけを感じながら、わたしたちは中庭へとむかった。

中庭はとても美しく、すばらしかった。

バラのアーチに、アイリスの花。百合にパンジーに、チューリップ。季節や咲き時があるはずの花々が、見事に並んで世界に色をあたえていた。

その中央には、お茶会用の白い机とイス。それもまた、見事な彫刻が彫られている。

「母さんはちょっと待っててね。いま、お茶もってくるよ」

「……ええ」

侍女に頼めば良いはずなのに、わざわざ自分で持ってこようとする息子の背中が、つい最近お手伝いをするために食器を運んでくれた小学生1年生の息子の背中を重ねる。

もう戻ってこない時を改めて感じて、わたしは自らの身体を抱きしめた。

「どうしてないているの？」

幼い、男の子の声がきこえた。

「健祐……？」

弾かれるように顔をあげると、そこにいたのは息子ではなかった。はちみつ色のふわふわとした髪に、深い緑の瞳の幼い男の子。ふんだんにフリルのついたシミ一つ無い白いシャツに、シワなんてひとつもない黒いズボン。襟元にはきれいにリボンが結ばれている。

そう、ちょうど、小学1年生だった健祐の年ごろの……。

「ちがう……わよね」

落胆して、ため息をついたとき。

「どうかなさったのですか？ お嬢さん^{レディー}」

「……え」

うしろから声がきこえて振り向くと、同じのはちみつ色と緑の瞳を宿した綺麗な青年がいた。

腕の良い職人が作ったとひとめでわかるほど、きれいで上品な黒い正装。開けられた上着の中には同じ素材のベストを着ている。その中にある白いシャツは本来であれば、ネクタイを締めるはずだと思うが、ボタンがふたつほど開けられていて、息子とは違う意味でラフなかつこうをしている。

どこかの貴族の人間だろうか、そうぼんやり思っていると青年は幼子にひとさし指を立ててしかりつける。

「こら、エリオット。またイタズラをしたのかい？」

それは違うんです、そう声をあげようとしたがその心配はなかったらしく、すぐに少年は可愛らしく頬をふくらました。

「ちがうよ！ ただ、おねいさんが泣いていたから気になっただけ！」

「ふふ……優しい子だね。じゃあ、ここは私にまかせて遊びに行きなさい。お前がレディーを元気にさせるのはいささか早いからね」
「そんなことないもんっ。でも、じいやがおべんきようしろってうるさいからもう行くね！」

「ああ、またね。可愛いエリオット」

そうしてちゅ、とエリオットと呼ばれた少年の頬にキスをして穏やかな顔で見送る。

それから申し訳なさそうにこちらを振り向いて、ひざをついてうやうやしく見上げる。

「申し訳ありません。レディ」

「いえ……。元気な、可愛い子ですね」

恐らくこの青年の弟だろう。幼い息子を彷彿とさせてさういうと、青年は苦笑する。

「元氣ざかりで困ります。好奇心旺盛で、しょっちゅう勉強から抜け出すのです」

「……いいですね」

つい、そんな言葉がこぼれ落ちる。

息子は死んだわけでもないし、むしろ毎日会っているというのに、こんなことを言ってしまう自分が嫌だった。

「でも、母親がいないのです。寂しさを紛らわすためなのかはわかりませんがね」

「そんなこと……」

そうか、ではこのひとの母親は死んでしまったのか。

「母親がいなくても、父親がいなくても、子どもは立派に育ちます。」

——親が手をかけなくても」

息子の健祐は、わたしが文句の言いようがないほど立派な青年に成長した。

わたしの出る幕なんて、なかったのだ。

そうおもうと、とても虚しい気分になった。

「……失礼」

わたしの言葉を聞いた青年は、するりとわたしの手をとった。そして、わたしの汚れた手をみつめる。白くてすべすべとした青年の美しい手とは比べようもないぐらい汚れてしまった、わたしの手を。「美しい手です。さぞ、ご息のため日々がんばって働いたのだ

と思います。……こんなになるまで想われるご子息が、羨ましい」

「……当たり前のことです」

自分の汚れた手をみせることが恥ずかしくて、顔をそむけるが、青年はじつとわたしを見つめる。

「――あなたに、あの子の母親になってもらいたい」

「え……？」

そうして、そっとわたしの手にキスを落とす。

それから今度は、ゆっくりと言う。

「母親の愛情を知らないあの子に、母の愛を教えていただきたい。

……駄目でしょうか？」

「それは――」

幼い背中を思い出す。

それは、小さな健祐だったし、エリオットでもあった。

もし。

もし、あの子が寂しいのであったのなら。自分は、その手助けができるだろうか。

そう考えて、気が付いたらわたしはこう答えていた。

「……わたしで、よければ」

青年は返事をきくと、安心したような顔で微笑んで立ち上がった。手をひっぱられ、うながされるままわたしもイスから立ち上がる。

「きゃ……っ！」

視界がぐるりと方向感覚を失い、目の前には青年の綺麗な顔と青い空がひろがっていた。

わたしの腰と両足に手をまわされ、横抱きにされていたのだ。

「え……え？ えええっ！？」

事態が理解できなくて、ただ声をあげていると、青年は和やかな笑みを浮かべる。

「ど……どういふことですか？」

しかし、聞いても彼は答えない。

抵抗することも忘れているうちに、聞き覚えのある声がわたしの耳に飛び込んできた。

「おい、クロードイウス」

「お兄さまー」

息子の健祐と、その恋人のクロエ。はちみつ色のふわふわとした髪の毛と、緑色の瞳を持った可憐な女性。

（はちみつ色の髪と、緑の瞳？）

そこではた、と疑問に思っ、今現在横抱きになっている青年をみつめる。

そうして、さきほどクロエ嬢の言った言葉を思い出す。

『お兄さま』

「ああ、ケンスケ。ちょうど良いところに」

「ちょうど良いってなんだよ。ひとの母さんを姫だっこなんかして親しそくに息子と話している青年を、ただ呆然とみているしかないわたし。」

「そうですわよ、お兄さま。またお仕事を放りだしてエリオットと遊んでいらしたのでしょうか？」

「はは、バレちゃった」

また、お兄さまという言葉が聞こえた。

クロエは、この国の王女。その兄ということは……。

「お……王子様？」

「はい、なんでしょうか。レディ？」

輝かしいばかりの笑顔で、答えられた。

「それより、ケンスケもクロエも聞きたまえ。大変、重要な話しだ」

「なんだよ、藪から棒に」

「そうですわよ」

青年は、わたしをいちべつしたあと、妙に通りの良い声で、それ

を宣言した。

「私、クローディウス・ディナン・シンフォニウスは、かの英雄であり勇者であり、唯一無二の友であるケンスケのお母上との婚約を発表する！」

未亡人となっていたわたしは、この瞬間、半強制的に再婚することとなったわけである。

安っぽい銀色の指輪が異世界の太陽の光を浴びて、怪しげに光り輝いたように思えた。

序章（後書き）

ついに、連載することとなりました。

応援してくださったみなさま、ありがとうございます。

技量のおぼつかないわたくしですが、どうかこれからよろしく願
いいたします。

小学1年生だった息子は突っ込みに変貌を遂げた。

「ふざけるな！」

青年もとい、シンフォニウス王国陛下のご子息。王子殿下のクロード・デウス・ディナン・シンフォニウス様が、声高らかにそう宣言してからすぐに、我が息子である健祐は声をあらげた。

「ふあっふあっふあ、ふあにおふる」

健祐は両手をクロード・デウスのほほにあてて、思い切り内側におしつぶしていた。

恐らく「ははは、何をする」と言っているのだろうとはわかるが、きれいな顔がたてにつぶされている光景はなにかいけないものを見てしまったような気分になる。

「そうですわよ！」

王女殿下であるクロエが、健祐と同じ口調でそういって、ヒールのついた靴のカカトでクロード・デウスの汚れひとつない革靴を踏み始めた。

「ひはい、ひはいって、ふほへ」

革靴が圧力を受けて沈んでいる音がなんとも痛々しい。クロード・デウスは笑っていたが、クロエからの攻撃はいささか想像するに余る痛みだろう。

それでもなお、わたしを持つ手を放さないのもある意味感嘆の域に値する。

わたしの重さはいたって普通の成人女性で決して重くはないが、長時間軽々と苦のない顔をして腕の力だけで体重を支えているのだ。「どうしてオレがお前を“父さん”って呼ぶことにならなきゃならないんだ。それに、母さんにはちゃんと許可とったのか？　また勝手に自分で決めたとか、そういうことじゃないんだよね？」

勝手に決めることが多いのか、という心の突っ込みを叫んでいる

うちに、クローディウスは健祐の手をふりきって得意げにこちらを見て花が咲くような笑顔で笑いかける。

「ちゃんと、承諾してくれたよ。ねえ、ハニー？」

「母さん!？」

「お母さま!？」

同意を求めるようにしてより親しい呼び方に変えたクローディウスに、信じられないように驚愕の声を上げる息子。そして母と呼ぶことを許可した覚えはないクロエが、手を口元にあてて目をみひらいていた。

三者三様の視線と注目をあびながら、わたしはようやく発言をする機会が得られ、3人の全ての視線から目をそらして口をもごもごさせながら言った。

「……承諾してません」

「いやいやいや……だって、エリオットの母になると言ったでしよう?」

「確かに、あの子の母になるとは言いました。それが、どうしてあなたと婚約することになるんですか……!？」

裏返った声でいうと、クローディアスは当たり前のような顔をした。

「どうしてって……あの子は私の子だから、そうなるだろう?」

「子って……」

どう見てもこの青年は20代中盤。確かにあの年齢の子を持つにしても不思議ではない年頃だが……。

「若すぎじゃありませんか……?」

「母さんそれ、18でオレを生んだ人間のセリフとは思えないよ。それと、たぶん母さんが思っている出産年齢とこの世界の基準年齢はだいぶ違うと思う。こっちでは基本的に12歳ぐらいで結婚するし、十代後半では当たり前前に子どもも作るから」

すかさず息子に突っ込みと、丁寧な解説を入れられてしまう。

「あの子はね、私が19の時に作った子だ。生みの親である妻はも

う死んでしまったが。だから私はあなたを愛人としてでもなく、正妃として迎え入れたい」

「お兄さま、それはいささかお早いお話しですわ。お母さまも混乱していらっしゃるでしょう？」

みかねたクロエが、重いため息を吐いて言う。

しかしだ、とクロードィウスは演技かかった口調で。

「善は急げ、という言葉がそちらの言葉にはあるのだろうか？ ああ、思い立ったら吉、だったかな。とにかくだ、めでたい知らせなら早く周囲に知らせるべきだろう？」

「いや、問題は絶対そっちじゃないぞ。というか認められるか、そんなもん」

「ですわ。本人の意思を確認するのが先……」

そうクロエがいったとき、息を飲み込むような音が彼女の喉から鳴る。

クロエだけではない。健祐までもが、顔を強ばらせていた。

「……へえ」

静かな声が、上からふりそそぐ。それはまるで、氷のように冷たい。

恐る恐る上を見上げると、目は決して笑っていないクロードィウスが頬笑みを浮かべている。

「父上の仕事を手伝い、事実上この国で権限と権力と信頼が上の存在などいない私に指図をする……と」

なお、クロードィウスの言葉は続く。まるでそれは、一国の王子というよりやくざがカタギの人間を脅している様子のようなだった。

「お前たちがいつまで経ってもくっつかないから、私がふたりの恋のみつかいになってあげたことも、すっかりさっぱり忘れてしまったと……？」

「……うっ」

「私は知っているのだよ。お前たちが未だに床入りどころか、接吻さえままならなく、手をつなぐのが精一杯という甘酸っぱすぎる仲

だということを……」

「待ってくださいまし、お兄さま！　そ……それ以上は……！」

「ああ、そういえばクロエが政略結婚しそうになったときに花嫁姿のクロエをさらっていったのは、私の知り合いの……」

「わかった、わかったから！　それ以上はここで言うな！」

健祐は顔を真っ赤にしながらクロードィウスの口を両手でふさぐ。クロエは、わたしから顔を隠すようにして背を向けてしまう。

わたしは、苦虫をかみつぶしていたような表情をしていただろう。成長した息子とはいえ、そういう話はあまり聞きたくなかったというのが母の心情である。

原因を作った張本人は勝ち誇った笑みをうかべ、目をほそめる。

「まあ婚約を申し込んだ理由としては、魔王討伐したばかりの忙しいこの時期にまざって、婚約者の父という形で貴族が権力を握るのを防ぐためというのがひとつ。正妻ができたばかりなら、あちらも娘を愛人として提供するにしても手を出しづらいだろう。

ふたつ、異世界からの客人であるあなたは、こちらではない思想・技術・知識を有している。

6歳のケンスケが運んできた思想も、私たちにかなりの影響を与えたからね。それに、このままハニーを放っておくと、国にとって喜ばしくない情報が心ない人間に聞かれてしまう可能性が高い。それを防ぐためというのと、その思想らを私が独占するためだ。他に愛人など作られると、漏れる可能性は一気に高くなるからね」

穏やかな顔で思ってもいなかった理由を述べられ、わたしはポカンとした顔をした。

「それって……」

「それって、別に母さんが好きとかじゃないってことだろ。オレの思想が役に立ったのなら、母さんが自由恋愛主義だってこともわかるだろうが」

腕を組み呆れた顔で、健祐が言いたいことを言ってくれる。

「そうとは言っていないさ。ちゃんと、私は彼女を愛しいと思うよ

？」

「出会って数分で何が芽生えるというのですの……」

「手とか」

そういえば、褒められたような気がして自分の汚れた両手を眺める。

「おい、中身。中身どこいった。あれほどお前、自由恋愛すばらしいとか言っていたじゃあないか」

「まあまあ、一目惚れという言葉がこの世にはあるではないか」

「お兄さまに一目惚れはありえませんか。身分を隠して過ごした学生時代には恋人が大勢いらっしゃったようですが、どの方も裏の情報を探るのに利用していただけではありませんか」

「そうだ。ユーリだって『お前ほど言っていることが信用ならない人間は初めて見た』なんて言っていたぐらいだし」

知らない人名まで出てきてしまい、わたしはすっかり会話に置いてけぼりをくらっていた。それを不満には感じないが、横抱き状態がずっと続くと居心地が悪い。

なのでここで、論点が外れた会話を軌道修正することにする。

息を大きく吸い込んで、ひとことひとはっきりと発音をするように心がける。

「つまり、わたしを婚約者にするといろいろと都合が良いんですよ」

「そうだよ、ハニー」

「無理です」

わたしははっきりと、意志を込めた視線で見上げて言う。

「わたしには夫がいます。形式だけでもあなたと婚約はできません」

「もういないのに？」

「……………」
なんのことなく放たれた言葉に、わたしの言葉は喉につつかえて出てこない。

それでも左手の薬指にはめた指輪を、右手でなぞって意を決して

言う。

「それでもです。わたしは夫を愛しています。あなただって、奥様がいらっしやったのでしょうか？ 彼女に愛情はないのですか？」

私かい？ と、彼は目を瞬く。

「もちろん、政略結婚だったとはいえ私なりに彼女を愛してはいたよ。でも、いなくなってしまったものは仕方がない。人間、楽しく生きるためには常に前向きでないと」

彼の態度は無情で薄情だ。仮にも結婚した女性に対する態度とは思えない。

軽蔑と苛立ちをこめて、わたしは虚勢をはる。

「……わたしは、あなたのような方は無理です。他をお当たりください」

「エリオット」

クローディウスのひとつことに、わたしの思考は停止した。

「エリオットはどうするんだい？ 母親を失って、日々さみしい想いをしているあの子をほおっておけなくて、あなたは私の誘いを受けたのだろうか？」

「それは……」

「私の息子となれば、取り入ろうとする連中など吐いて捨てるほどいる。同じ城に住んでいても、接触するのは難しい。それが、婚約という約束を取り付けるだけで簡単に達成できるんだ。それに……好意で取り付けた約束を無下にするほど、あなたは優柔不断な人間かな？」

「……………」

わたしは薬指の指輪を抱きしめるようにしたあと、健祐に視線を移す。

愛しい息子はなにもいわない。ただ、わたしの言葉を待っている。わたしは、ゆっくりと視線をあげた。

「……期待しているよ、ハニー」

クローディウスはこれ以上なくうれしそうに、喉の奥をクツクツ

と鳴らせて口の端をつりあげた。

大丈夫。

わたしは、指輪の無機質で固い感触を確かめながらそう自分に言い聞かせた。

小学1年生だった息子は突っ込みに変貌を遂げた。 (後書き)

王子様が最初からブラックです。

小学1年生だった息子は腹を強打されて気絶した。(前書き)

日間恋愛ランキング3位!?

お気に入り件数240件!?

ヒィー(。(。D。)(。ガタガタ

おおおおお…恐れ多いです。ありがとうございます！

小学1年生だった息子は腹を強打されて気絶した。

クロードィウスはわたしが婚約を認めるなり、横抱きにしたその状態のまま城の中へと入り、エリオットが勉強しているという塔まで連れていかれることになった。

もちろん健祐は阻止しようとしていたが、足を一步踏み入れたとたん、風を切るような音が鳴り、彼はクロエの方へ倒れ込んでしまった。

「あらあら、お疲れなのですわね。ああ、ケンスケのことはおまかせくださいな。行つてらっしゃいまし」

ぎこちない笑みを浮かべたクロエに見送られてきたのであった。

エリオットがいる部屋は、城内でも特に信頼された人間しか入ることのできない塔の中にある。そこには王族と、健祐、そして一部の側近の部屋がある。

わたしが滞在しているのは少し遠い別の客室で、いくら健祐の肉親とは言っても信頼を得ていないことは明白。

3週間ばうっと過ごしていて、全く気づかなかったが改めて考えると、信用されていないのだと思って少し落ち込んだ。

廊下にはシンフォニウス騎士団第一騎士一番隊の王城側近隊員が常時しており、すぐにでも剣が抜けるように、肌が傷むぐらいのピリピリとした緊張感をはなっている。

わたしも後で聞いた話なのだが、シンフォニウス騎士団第一騎士一番隊というのは、一番隊から九番隊まであるシンフォニウス騎士団の隊で最上級の実力を誇っているという。その王族付きなら、その中でもかなりの信頼と実力があるのだろう。

騎士団をとりまとめる守備隊長と呼ばれる人物も見回りをしているらしく、健祐の話によると拳一発でひとを気絶させることなど造

作もない恐ろしい人物だとか。

昨日今日きたばかりの部外者を、そう易々と入れられるはずなどない雰囲気なのだ。

言われなくても王族は守るに値する重要な存在というのはわかるが、ここまでする必要があるのだろうか。

そのことをクローディウスにきくと、内心を探らせない笑顔で答えてくれた。

「そうだねえ……これは、君に婚約を申し出た理由にもつながるんだけど。君たちの世界では食前と食後に手を合わせると聞いたけど、本当かい？」

なんの脈絡もなくそう話題をふられ、わたしは戸惑う。不満を顔にだしながらも首を縦にふって肯定した。

「それは、ただの習慣？ それとも、なにかの儀式なのかな？」

「……習慣でもあり、儀式です。作ってくれたひとにありがとう、食料をくれてありがとう、ご飯を食べさせてくれてありがとう、って神様に感謝してお礼をするわ」

仏教から来ている儀式らしいが、外国でも形式は違って同じようなことをしているからおおむね間違っていないはずだ。

「では、その“神様”って誰だい？」

「それは――」

わたしは言葉をつまらせた。

「ケンスケから聞いてね、不思議だったんだ。君たちはお盆という季節になると、先祖の霊が帰ってくるから“お墓参り”というものをするし、クリスマスという日になると神がひとの子として生まれ、たことを祝う記念日だからってみんなで祝って“さんたくろーす”という紳士のご老体がプレゼントを子どもひとりひとりに用意するという。それがひとつの思想のもとでの行為ならばまだ良かったが、そうではないのだろうか？」

その言い方にいささかムツとして、口をとがらせる。

「日本人は無宗教の人間が多いから、仕方ありません」

優柔不断な国民なんだな、とも思ってしまったが。

「それだと、困るのだよ」

「意味がわかりません」

「私たちの世界……というか、この国ではね。神様はひとりだけなんだ」

「神様はひとりなんじゃないんですか？」

言葉の意図がわからない。

「宗教、というのは独自に神をつくることだ。だから君たちの世界では、宗教によっていろいろな神が存在するのだろう？　たくさんの神……八百万の神というらしいが、それらがいると言っている一方で、他の人間は神はひとりだけだと言う。つじつまが合わないではないか」

「それも……そうですね」

それはひとそれぞれの考えの問題でもある。

「そういう考え……。つまり神様がたくさんいるだとか、私たちの知る神の他に神がいては困るのだよ」

「なぜですか？」

ここでクロードイウスはすぐには答えず、視線を壁へ移動させる。真っ赤なカーペットが敷かれている廊下の壁には、丁寧に額縁された絵が飾っており、そこには歴代の王たちと思われる肖像画が飾ってある。

「シンフォニウス王国ではね、天地創造の神はただひとり。神は天や地をささえるので忙しく、人間に気をかける暇はない。だから、天の使いを地上へともたらしめて人間のために働いてもらうことにした。

天の使いは、人間がより幸せに暮らせるようにいろいろなものをもたらした。――そして、ひとつの天の使いは人間に姿を変えて、人間を治めることにした」

金色の髪をした、歴代の王の肖像画。絵だというのに、その姿は威厳に満ちており圧迫した空気が流れ込んでくるようだった。

彼がなにをいいたいかわかり、わたしは口をひらく。

「それが、王……なんですね」

「そう、王。王は天の使いであり、絶対的な存在。それを揺らがせてはいけない。絶対王政。君のいう“自由”の思想は、この政治体制を揺るがすほど危険なものなのだ」

つまり日本人なら誰でも中学校の社会で学ぶ“基本的人権”の考えから来る行動は、この国を滅ぼすことになりかねないということか。

「もちろん、その全てを否定するわけではないよ。これまでは政略結婚や親同士が決めた婚姻が主流だったが、お互い好き合った者同士の婚姻も少しだが認めるようになった。

他にも私が学生のころ、平民出身の貧乏なユーリといういけ好かない男が学費が足りないからと言って上級学校を辞めようとしていたが、ケンスケの言う“しょおがくきんせえど”という考えから解決に導いたりもした」

奨学金制度、だろうか。

なんで小学1年生がそんな知識を知っていたのだろうと頭をひねらせると、最近よく「うちにはお金はないから、大きくなったら奨学金制度つかうことにするからお勉強しなさいよ。返すのあなただし」と言っていたことを思い出した。

勉強させるための方便だったのだが、思わぬところで自分の発言が役にたっていたらしい。

子どもは自分でさえ忘れていることを本当によく覚えているものだと、妙に感心してしまった。

「具体的にどういうものかは知らなかったようだが……返すのがあなた、という言葉でなんとか考えた。もう少し覚えていて欲しかったものだ」

ぷりぷりと頬をふくらまし、怒ったように彼はいった。

小学1年生にそれを求めるのは酷な話だと思われるのだが。

「まあ、今の話をまとめると、王は天の使いであるから何を犠牲に

しても守る必要があるから警備が厳重。神は死なないけど、人間の形を取った神の使いには死があるからね。ひととして天に最も近い王があがめる神の他に神がいると、政治体制事態が崩壊する危険性があるから君を不用意にぺらぺら話させてもいけない……と、こういうことだ」

わたし、ここに来て良かったのだろうか。

思わず言いそうになったが、思いとどまった。マイナスよりもプラスの面もあるから、なんとかなると考えたのかもしれない。

「それならわたしを使うより、ご自身で日本に行って知識を吸収してきたら良いのではないですか？」

わたしがこっちからあっちへ行くときに使った、魔王の遺産やらを使えばわざわざそんな危険性のあることをしなくて良いと思われるのだが。

「案外、おバカなのかい？ あちらの一瞬はこちらでは十数年に相当するのだよ。そんなことをしていたら、戻ったときには何代世代交代していることやら」

見下した言い方に正直良い想いはしなかったが、グッと堪え、すこしばかりの反抗心を加えて「なら、外国から来たひとはどうするんですか？ わたしのいた国でも、外国からいろんな宗教が持ち運ばれてきたんですよ」

この国まで来るということは、それなりに発達した文化を持っているはずだ。過去の日本のような鎖国の状態をとっていたって、それでも完璧に外のつながりを経っていたわけではない。否が応でも、他の思想が侵入してくるはずだ。

「ああ、それなら大丈夫」

しかしあっさりとそういわれ、少しばかり拍子抜けしてしまう。どうということなのだろうか。

「この国以外の国はね、ないんだ。具体的にいうと、近くの国が一切ない。遠くにもないんだろうね、これまで誰も来たことないし。治める上では都合が良いけど、文化が発展しないのが玉にきずだね」

玉にきず、という言葉ひとつで片づけられる問題なのだろうか。

まあ、この国自体はかなり広いし、魔王との戦いでだいぶ荒廃しているからそちに必死で他の国を攻める必要もないしね。と、彼はまるで他人事のように話す。

それはおそらく、彼が生きているうちには絶対に起こることのない問題だからだろうか。それでも、この国を将来になう者としていささか不適切な発言にも思えるが。

結局、わたしの反撃にもなっていない反撃は見事にクロスカウンターをくらってしまったのであった。

ややしよんぼりしているわたしを見て、理解を得たことがうれしいのか、反撃に気づいて返り討ちにしたことが楽しいのかはわからないが、彼は笑う。

「わかってくれたのならうれしいよハニー」

「……今更ですけど、ハニーって」

だが、わたしの問いは無視されてクロードィウスは浮き足立った様子でとある扉の前に足を止め、わたしを抱きかかえた状態で器用に取っ手をひっぱった。

立場のなせる技なのか、ノックひとつなく入室する。この世界の礼儀や作法などわたしは知らなかったが、彼の行動は間違いなく正式なものではないことは一目瞭然である。

「というわけで、寂しいと思って母上をつれてきたよ、エリオット！」

入るなり、勉強机に座っている幼い背中に楽しそうに告げたのだった。

その犬猫買ってきたみたい言い方は、いささかどうなんだろうかとも思う。

「ちちうえ、なにが“というわけで”なのか全然わかんないよ」

案の定、エリオットからの確な突っ込みがはいった。しかし、わ

たしが思っていた突っ込みとは違っていたが。

「可愛いエリオット。つまりはね、このひとが新しい母上さ。私と婚約を約束してくれたのだから」

クロードィウスはようやくそこでわたしを降ろし、勉強机からはなれた息子へ両手をひろげる。

エリオットの傍らには老齡の紳士的な雰囲気を持った燕尾服の男性が立っており、彼がエリオットの言っていた「じいや」なのかもしれない。

「ははうえ……？」

エリオットは大きい目をきよとん、と瞬いてわたしを見つめた。

「ええと……よろしくね。エリオット」

彼に近づき、頭をなでてほえみかけた。

エリオットの髪は絹糸のようにさらさらとしていて、すぐに指からこぼれおちる。

しばらく無言でわたしを見つめていたエリオットだったが、白い歯をいっばいに見せて笑った。

「うん、よろしくね！ ははうえ！」

「……え、ええ」

子どもらしい、元気な言葉と笑み。

けれど、思っていたリアクションとはどこか違う気が……。

わたしはてっきり、もっと無邪気に喜ぶか、それとも母なんていない、と拗ねるなどの反応を示すのだと思っていたのだ。

砂漠で蜃気楼を見ているような気分だ。すぐ近くに見えるのに、実体がない。不思議と、そうおもった。

「うれしいな。ボク、寂しかったんだ！」

そういつて、わたしに抱きつく。

「ちちうえ、ありがとう！」

そして、クロードィウスに抱きついた。

（……気のせい、だったのかな）

どこかひっかかるものを感じたが、その正体もわからなかったの

で、気のせいだったのだと判断した。

「うん、良い返事だ。お前も前妻のことなど忘れて、新しい母上と仲良くね」

「……王子！」

じいやの、焦ったように叱咤する声が響く。

「エリオット様のこともお考えになってください。目の前でお母上を亡くされて、辛い思いをされているのですよ。それに、突然婚約するなどとはいかがなことが！ 戯れ言もいい加減にして頂きたい！」

ようやく出てきたもつともすぎる発言に、わたしはじいやを拝みたくなった。

いや、もつともな意見は出ていたが、それを真っ向から叱れる人物にであったことに感謝している。怒られた張本人にはなんの効果も発揮していないようだったが。

いや、それよりも……。

「目の前で……？」

「ああ、言っていなかったかい？」

クロードィウスはなんてことないように、エリオットを抱きかかえながらいった。

その態度にわたしは拳をぎゅ、とにぎりしめる。

「そんな、簡単に……！」

悲鳴のような声が喉からでた。クロードィウスの反応はあまりにも、冷たすぎる。

子どもの目の前でその言葉はないだろう、と思わず言いそうになったところで、エリオットの凜とした声にさえぎられる。

「ボクにはもう、新しいはうえがいるから大丈夫だよ！」

「でも……」

「ほら、エリオットもこうしていることだし、気にする必要はないよハニー」

本人——エリオットはそういつている。

だけど、わたしは見逃さなかった。

母親を亡くした、という言葉聞いた瞬間に口を間一文にひきしめたエリオットの表情を。

小学1年生だった息子は腹を強打されて気絶した。（後書き）

みなさまのご期待に添える作品がつかれるかどうか、かなりビビリまくってます。何度とんずらしようと思ったことかつてぐらい、ビビってます。

どどどど…どうか、見捨てないでおつき合ってくださいませ。

おれ、この小説投稿したら実家の畑を手伝いに帰るんだ…（死亡フラグ）

注意点、誤字脱字、ご感想……などなど、お待ちしております。誤字脱字に関してはかなりありそうで、ビビってます。

小学1年生だった息子は机の上にあるものを見て絶句した。

「なんで、あんな冷たい言い方をしたんですか？」

「あんな——とは？」

「用件が済んだのなら、お帰りください！ エリオット様はお勉強中なのですぞ！ それと、婚約のお話しは陛下と交えて改めて伺う場を設けます」と、怒り心頭のじいやに追い出され、廊下をでた瞬間にわたしはクロードィウスにそう問いた。

「先妻のお話しです。すくなくとも、エリオットは今でもお母様を慕っているんでしょう？ あんな言い方、傷つくだけです」

「傷つくように言ったんだから、当たり前じゃないか」

彼は自らの髪をくるくるといじりながら答える。

この王子はなにを考えているのか、全くわからない。

「揺さぶりをかけたんだ。国王になる身ならば、あの程度で動揺してはいけないのだよ」

「では、あなたはこの国のためだけに、あんな風に接して——！」思わず声をあげようとしたが、陶器のように綺麗なクロードィウスの人差し指がわたしの唇にそっとあてられる。

ぞっとするような低い声で、ささやくように言った。

「——私は君の思想や知識が必要だとは言ったが、価値観を押しつけろとはいっていないよ」

わたしに、口出しはしないで欲しいということなのか。

「……お言葉ですが、これは正論です。子どもの将来を勝手に親が決めて良いはずありません」

「それが価値観を押しつけていると言っているのだよ」

価値観。

先ほど王政の話を聞いたときもそうだったが、政略結婚、親同士が決めた婚姻。この国は親が子どもの将来を決めることが当たり前なのだ。

「……でも、あなたは自由恋愛が素晴らしいとおっしゃっていました。それは、子どもが自分自身で考え、決めることにご理解があるのでしょうか？」

健祐と会話をしていたときに聞いたし、わたしと先ほど話をしていたときにも言っていた。

自由な恋愛が良いのなら、自由な将来だってあっても良いのではないか。

「そうだね。でも、それとこれとは話が違うのだよ」

「これまで培ってきたものを壊したくないからですか？」

地位や権力。絶対王政を揺るがせない。揺るがせることを許さないクロードィウスの考えなら、あり得ることだ。

案の定、そうさ。と短い解答が返ってくる。

「でもね、そうだけど、そうじゃない。絶対王政でないといけない。あの子には国王になってもらわれないといけないのだ」

本人の意思を無視してでも、遂行しなくてはいけないほどのもの。

「……それは、なぜですか」

人差し指をたてて、楽しそうに。でも、瞳の奥には憂いを帯びて。

「魔にね」

いっぱくおいて。

「魅^とり込まれてしまうからさ」

云った。

そうしてしばし、見つめ合う。

青の瞳はまるで宝石のように美しいが、どこか冷たさを宿している。それが、わたしの両目をじっと見つめている。

時が止まったかのような、硬直した時間。

最初に沈黙をやぶったのは、わたしだった。

「……わたしは、認められません」

この王子の言っている意味はいまだにわからない。答えを言う気も、彼にはないように思える。

「子どもの意思を無視するなんて、認められません。どんな理由が

あっても」

お互いに意見や主張を引く様子はみられない。だから、わたしは変わることもない自分の考えを、主張を伝えた。

クロードィウスはわたしのそんな態度を不満に思う様子もみせず、相変わらず飄々とした態度であっさりと言った。

「そうだね。あの子は本当に国王になりたいわけではなさそうだし。……でも、いずれ君もわかる」

いずれ、という言い方は、思い知る、というニュアンスに似ていて、それがまたわたしの不満心をかきたてる。

反論したい気持ちにもなったが、この性根のねじ曲がった王子に言ってもなんの効果もないことは出会って一日のわたしでもすぐに分かった。

だからわたしは何も言わず、クロードィウスのよこを通り抜ける。これ以上、この王子に話すことなどないのだ。

わたしはこれまで婚約を破棄されるような挑戦的なことを言っていたが、クロードィウスに気にしている様子は無い。彼が何を考えているのかわからないが、わたしはわたしで勝手にエリオットに接していこう。

そうおもっていると、背中ごしに声がかかる。

「あの子はね、自分を偽っている」

わたしの歩みが止まり、首だけをうしろにふりむかせる。

お母様の話をしたとき一瞬だけみせた、あの苦しそうな表情を思い出す。

それだけで、彼がどれほどお母様を想っていたのかがわかった。あんな幼い子に気をつかわせてしまっていると思うと、胸が締め付けられる。

「私に、よい子だと思わせたいのだよ。あの子は私に似て、とても賢い。――私たちが思っているより子どもだし、大人なのだ」

でもね、と背後の声はすこしだけ間をおいて言った。

「王になる上で大切なことが足りない。――今のあなたには、わからないかもしれないが」

「……そんな風に、自分を偽らない子にしてみせます」

吐き捨てるように、わたしはそういった。

勝手に親の都合で王になるためだと教育され、冷たく接されてしまうエリオット。

ひとにはいろいろな可能性があるはずなのに、生まれながら一本のレールの上しか用意されていないなんて酷すぎる。

この世界に無理矢理連れてこられて、勇者として生きて行くことを余儀なくされた我が子のように。

「この世界は、酷すぎます」

クロードィウスの返答は、なかった。

長い廊下を歩き始める。赤いカーペットと、床を踏む音だけが鳴り響く。

クロードィウスはわたしの背をみつめているのだろうか。彼が動き出す気配も、音もない。

しかし、水面に滴が落ちたようないさな声が聞こえた気がする。それは、わたしへの返答というよりは、独り言のように感じられた。

「ここも、あなたのいた世界も、なにも変わらないさ」

そんなことない。

胸から熱くて悲しいものがあふれてきて、眉間をぎゅ、とひきしめる。

視界は、どうしてか歪んでいた。

左手の指輪にしきりに触れて、落ち着こうとしたが駄目だった。

(あなた……)

もうどこにもいない、愛しいひとの名前を心の中で叫んだ。

「クローディウスっ！」

自室で本をのんびり読んでいたクローディウスの部屋に、ノックもせず勢い良く入ってきたのは、親友であり戦友であるケンスケ。腹のダメージがまだ残っているらしく、左手で腹部を抑えながら、悪魔のような形相で睨みつけてきた。

「ああ、やあ。もう目が覚めたのかい？ さすがは、我が国を救った勇者だ。王子たる私みずから褒めてやろう。えらいえらい」

そういつて、頭をなでるように右手をぷらぷら動かす。

幼児を褒めるように完璧にバカにされた態度に、ケンスケは顔を真っ赤にさせながらつかつかとクローディウスにほうに歩み寄る。

「ふざけるな！ 二重にふざけるな！ なんでオレが寝ている間に、婚約が正式に決まってるんだよ。なんでオレが寝ている間に、ご丁寧にもオレ愛用の胃腸薬が大量に机に置いてあるんだよ。そして、仕事サボるな。やれ！」

次から次へと、とめどなく言葉が発せられる。

どうやらかなり怒っているようである。

自分の承諾もなしに勝手に実母との婚姻の話が進められたのだから、当たり前前の反応なのだが。

「やだなあ。怒ると思ったから、先を見越して薬を手配してやったのではないか。それはかなり貴重な薬なのだぞ。国民の血税から購入した薬だ。ありがたく使いたまえ」

「怒るとわかっていて、その血税が使われると見越しているのなら原因をなんとかしろ！ このバカ王子！」

「バカとは失礼な。私は少なくとも、君よりは賢いつもりだが」

「そういう意味じゃないんだよ！ 行動がバカだって言ってるんだ！」

机をおもいきり叩いて、怒鳴るケイスケ。

「説明しろ。なんでいきなりプ……プロポーズなんてしたんだ」

焦げ茶色の瞳が射抜くようにまっすぐクロードィウスを見つめる。

「それはもちろん、ふさぎ込んでいるハニーを見たらなんとかしてやりたいと思うのが、紳士ではないか」

そのあくまでふざけた態度に、日頃の苦勞を感じさせるため息をはくケンスケ。

「……お前は紳士というより、ペテン師だ」

「それは光栄だ。でも、私は良い方のペテンだがね」

「ペテンに良いも悪いもあるか」

「うむ、あると思うぞ。ちなみに、婚約が正式に決まったという答えについてだが……父上をそのペテンというもので丸め込み、官の反対を弱みを握って揺さぶることで承諾させ、歴代最高のはやさで国民に発表をした。前代未聞だと、呆然とした官の顔が面白かったな」

「ちょっとまって！」

ケンスケが突っ込み驚くのも無理はない。

彼が気絶してからまだ数刻しか経っていないのだ。

その間に全てを終えたクロードィウスがすごいのか、常識を逸したクロードィウスの行動がおかしいのか。

「エリオットがね」

両手をくんで、クロードィウスがこぼれるように言葉をつむいだ。

「私に嘘をつく。子どもの浅知恵だが、これまで私はその浅知恵に助けられてきた」

魔王を倒す前の国の内情はそれは酷かった。

あの当時はこの王城も敵に満ちていて、王妃ともども別居の生活を送っていた。

クロードィウスは魔王討伐のために働き、とうてい我が子を気に

かける余裕なんてなかったのだ。

そんな生活をずっと続けているうちに、父を気遣い、周りを気遣い、幼いながらも卓越して明るく振る舞う子になってしまっていた。それにクローディウスは気づいていた。だけれども、気づいていないふりをしていた。

戦いには、子どもの存在は邪魔だったのだ。

皮肉にも、そのおかげで結果的にこうして勝利を押さえる形になってしまったわけだが。

「私に似て、王になるのに相応しい子になりそうなのは確かだがね。しかし、一番大切なものが欠けている」

クローディウスの言いたいことが伝わった様子のケンスケだったが、まだ引つかかることがあるらしく自らの意見をのべる。

「でも、それだけならわざわざ婚約までする必要はないだろう。教育係にすれば良い。……それなら、母さんの目的も達成できるんだし」

最後の部分の声は小さく、呼吸ができない状態のような苦しみを帯びている。

ケンスケはわかっているのだ。

自分の母が、自分の身代わりとしてエリオットを育てたいと思っていることを。

それは自然の摂理で、どうしようもないことだとはわかっているはずだ。だからこそ、おふざけのように反対することしかできないのだ。

「ああ、そういえばその手もあったね」

ぽん、と手をうって、たった今思いついたとばかりに言った。

その態度に、まるで空気が抜けたようにがっくりと肩を落としたケンスケは、近くにあったイスに倒れ込むように座る。

足を大っぴらにひろげ、顔に片手をあてて長い長いため息を吐いた。もう片方の手は、胃のあたりをおさえている。

さっきの入室の仕方といい、王子の目の前でこんな態度ができる

のはケンスケだけだろうな、とクローディウスはその様子がおかしくて小さく苦笑した。

「……本当に、お前は何を考えているのかわからない」

「うん。親友とはいえ、私の考えが漏れるようならばやっていけないからね」

「ああ……胃が痛い……」

「うん。胃薬を飲みたまえ」

机の水差しと、傍らに置いてある胃腸薬を指さす。ケンスケがこの部屋に来ることを読んだ上での用意周到加減である。

「万が一にも母さんをお……押し倒したりしたら、仕事やめてやるからな」

しかし動かず、うめくように念を押すケンスケ。

「つまり、彼女からオーケーサインが出たらやっても良いということだね。もしくは、押し倒したりしなければ何をしても良い、と」

「……駄目だ。駄目。手を出すな、バカ」

「バカではないと言っているだろうに。……そうだな、どうしようかな」

そう言うと、尋常じゃない殺意を秘めたオーラで睨みつけられた。さすがに危機感を覚えて、やや焦りながらもあっけらかんとした様子で笑う。

「ははは、冗談だって」

たぶん、ね。

戦闘力でいうならば、圧倒的に不利なクローディウスは声に出さずに心の中で言葉を付け足した。

「さてと……」

そろそろ仕事にでも取りかかろうと思い、重い腰をあげ、この王城のどこかにいる女性のことを考える。

「なにも変わらないさ。ここも、あなたのいた世界も」

目を閉じて、真っ暗な世界の中で語りかける。

クローディウスは珍しく、自分の信じる神に祈った。

願わくば、彼女が気づいてくれるように。
そうしたら、きっと素晴らしいのに。

「もちろん、努力は惜しまないけどね」
策は、打ってある。

小学1年生だった息子は机の上にあるものを見て絶句した。(後書き)

いつもありがとうございます！

常に逃げ腰ですが、頑張ります。

健祐と王子の会話が楽しいです。

お母さん、シリアスが多いからギャグが混じると楽しいです。

疑問点、変な部分、ご感想、待っております！

※10／28少しだけ修正しました。

小学1年生だった息子はポケットマネーがなくなっているのに気づいた。

「おつかい？」

数時間経って、エリオットとこれからどう接して行こうかと部屋で思案していたときだ。

控えめなノックが聞こえ、返事をすると思祐の声が聞こえたのでそれに応じる。

入ってきた息子は、まさしく無然とした表情をしていた。不機嫌な、という意味ではない。失望してぼんやりしている様子、というのが正しい意味だとか。そう、まさしくそんな顔。

クロエが疲労といていたから身体は大丈夫なのかと聞いたら、苦々しい顔で「すこし休んだから大丈夫」と答えられる。だが、本当に具合が悪そうだ。具体的にいうと、胃のあたりをおさえている。胃が痛いのだろうか。胃腸炎であれば、はやく医者ですすめないと。だが、わたしが口を開くより先にそれよりも、と彼のほうが本題を切り出した。

「そう、おつかい。あのバ……じゃなくて、クロードィウスが欲しいものがあるから、エリオットと一緒ににおつかいに行ってきたほしって」

お金はもらってる、と小銭が入っていると思われる皮の袋を取り出す。

「母さんにもこの国のことを知って欲しいという理由と、エリオットはあまり城から出たことがないから社会勉強も兼ねて、だそうだ」

「そう……」

半ば喧嘩別れしたような雰囲気だったのに、どうしてそんなことを易々と頼めるのだろうか。

場合によってはエリオットを日本に連れて帰ってしまうかもしれない、ぐらいまで考えていたのだが、毒気を抜かれた気分だ。

「でもわたし、この国のことについて知らないわ。……健祐は来れないの？」

「……ごめん。仕事をやらない王子が毎日歩き回っていて、仕事が溜まってるんだ」

本来に残念そうな顔で答えられる。

健祐の仕事なのだが、彼は役職で言うところの王子近衛相談役兼政取おうしこのえそうだんやくまつりごとととりしまりでんたつじん締伝達人おしでんたつじんというらしい。

つまりは、王子の護衛も兼ねたお目付役の役職と、政治に関する情報をまとめて王や王子、その他の官に伝達するという役職のふたつを兼任している。

その理由は、この国の階級制度と関わっている。

伯爵などの階級は生まれながらに与えられるものだが、王国にとって名誉ある活躍を見せた人間にのみ授けられる一代かぎりの階級“ナイト”。それを健祐はもらっている。

ナイトは王族のすぐ下の階級。実質、王族の次に地位があるということだ。

そのおかげで一部のかぎられた者しか入れない塔に自由に出入りできる彼は、あちこち歩き回るのには適任。

わたしはこのときまだ知らなかったが、結果的に王子と離れる機会も増えて、そのたびに仕事を放り出す彼を連れ戻すのも仕事だった。ついでに、王子がやらない仕事を肩代わりするのも。

今この時点でも、仕事はたっぷり残っていたというわけだ。

だが、そんなことを知るよしもないわたしはのんきに「仕方ないね」と相づちをうつ。

「でも、不用意にわたしを不用意にしゃべらせてはいけないのにかけても大丈夫なの？」

確か彼はわたしの持つ思想が危ないからという理由で、他人との接触を禁じたいと言っていたはずだ。

「“素性を言わなければ大丈夫だし、万が一に君の考えを街の人間に言ってしまうても頭のおかしい女だと思われるだけだから大丈夫

さ”……らしい。言っていることがちぐはぐすぎて、あいつの頭がおかしいんじゃないかと思うよ」

「言い得て妙ね」

つい称賛してしまった。

「とにかくだ。これから行くイース・タウンも裏通りとか行かなければ治安も安定しているし、目的のモノも健全な店で売っているから大丈夫だよ」

健全でないモノを売っている店もあるのか。

いや、それよりも気になることがあった。

「ちよっと待って。イースって東^{イースト}って意味よね。なら、四方に街があるってこと？」

健祐は目をぱちぱちさせて、それから思い出したように説明してくれた。

「ああ、言ってなかったね。この国は……そうだな、ドーナツ型なんだ」

「ドーナツって……ホットケーキを油で揚げて、砂糖をまぶした円形状のあれ？」

うん、と健祐が頷いて説明をしてくれる。

丸いリング状のドーナツを思い出して、そういえばこの子好きだったなあ、なんてのんきなことを考えた。

彼は指でわっかをつくる。

「王城が真ん中で、その周りには四方に分かれた城下町。北はノイス、南はサエス、東はイース、西がウスト」

それからさらに、その外側にわっかをつくる。

「その外側にはまた円形状に“帰還の川”っていう大きな川がある。そして、その周りを取り囲むように8つに分かれた土地と町があるんだよ。城下町は四方だけど、川を越えた向こうには八方の町があるってことかな」

「その外は？ 他に国がないのは知っているけど」

そうなれば、一面に森が広がっていると、海に囲まれていると

か、こちらとしても脱出できない状況にあるのだろうか。

健祐はかぶりをふる。

「なにもない。正しくは、あたり一面が荒野。草や木なんて生えることがまずない。――国の中ではあんなにも植物が育つのにね」

それはとても不思議なことだ。

いくら荒廃していても、植物の生きる力というものは強力なはずだ。なのに、一步国の外にでるだけで天と地ほどの差があるというのか。

わたしは、頭のなかで荒野の大地を思い浮かべる。

障害物にあたることのない風がふき、土を舞い上げる。風の音しか聞こえない世界で、足を踏み入れるとコロリと小さな小石を踏む。国の中にはいれば、緑が花が人がいるのに。

一步、国の外へでるとなにもない世界。

もしかしたら、この国はこの世界で唯一の国なのかもしれない。

そう思うと、ここはとても寂しくて、悲しい世界だ。

「どうしたの、母さん？」

ひょっこりと健介がわたしの顔を覗き込んで、そこでわたしの思考は中断された。

慌ててわたしは、なんでもないと首をふる。

「……？　じゃあ、続けるよ」

誤魔化されたのが気になるのか、若干さきほどの話題を引きずった様子だったが話を進めるほうを優先したようで言葉を続けた。

「とにかく、これから行ってもらうのは東にある城下町、イース。食品加工の技術が発展しているし、旅の講師や踊り子に、唱歌人……国中をまわっているひとたちがたくさん来ていると思うから、きつと楽しいよ」

お金の入った袋を手のひらにぽん、と置かれる。

以外とずっしりとした感触で袋をすこしあけると金色や銀色、銅色のコインがぎっしりとつまっていた。これがどのぐらいの価値があるのかはわからないが、少ない金額では決してないだろう。

袋の紐をとじて、健祐に礼をいった。

「ありがとう。とにかく、エリオットと行ってみるわ」

「うん、どういたしまして。それと、その格好じゃあ町中では目立つから着替えも用意しておくよ」

「そんな、なにからなにまで……」

甲斐甲斐しく世話を焼いてくれて、なんだか申し訳ない。

けれど健祐は笑って「いいんだ」と言った。

「母さんの手伝いができるなら、それだけでうれしいから」

その言葉に、胸の奥から熱いものがこみ上げて、つつい涙ぐみそうになる。

「ありがとう、健祐」

「……うん」

どこか寂しそうに、どこか照れたように健祐ははにかんで、わたしの手をとってくれた。

「どうかした？」

「……うん、なんでもない」

なにか言いたげな様子だったが、首をふられてしまう。

どうしたんだろうか。

「イス・タウンには、王城からの脱出通路のひとつから行くんだ。地下通路だから、明かりが必要だね」

明るくそういわれ、大きいわが子の手に引かれる。

（それほど、気にするほどの話題じゃなかったのかしら）

前を歩く息子の顔は、見えなかった。

小学1年生だった息子はポケットマネーがなくなっているのに気づいた。

（後妻

たくさんのお気に入り登録ありがとうございます…！（汗）
見捨てないでくださいね！（必死）

小話を活動報告のほうに乗せてありますので、可愛い息子が見たい
かたは是非ごらんになってください。

感想・突っ込み・誤字脱字…お待ちしております。

小学1年生だった息子は空っぽの職場を見て怒っていた。

「お店のお姉さん、いいひとでよかったね！ 母上」

「え……ええ、そうね」

元氣よく微笑むエリオットに、若干引きつった笑みで相づちを返した。

結果的にいうと、おつかいは簡単で、なおかつすぐに終わった。だが、その中身が問題だった。

入った先は、ジャム屋。

それなり繁盛している店のようで、多くの人が入り出りしていた。家庭的な店内には様々な種類のジャムが配置されており、甘い香りが食欲をそそる。

イチゴ、と健祐に手渡された紙には書いてある。

正直、彼の字はお世辞にもきれいではない。一ヶ月近く前に見た小学1年生のときと同じレベルであった。

ここでもひとつ気がついたのだが、自分がいま使っている言葉は日本語じゃないかもしれないということだ。

この国の文字は英語の筆記体みたいな形をしている。どう考えてもひらがなやカタカナ、漢字は使われていない。

言葉だけ日本語で、文字は英語というのはまずないだろう。そもそも、まったく違う文化をもっているこの国では日本語が使われているかどうかも怪しい。

原理はわからないが、何かが勝手に翻訳してくれたのだろう。

とにかくだ、文字は読めなかったがイチゴらしい絵柄とビンの色で容易にわたしは目的の品にたどりつくことができた。

カウンターにいる30代後半ぐらいの女性に声をかけると、人当たりの良い笑みを浮かべて慣れた手つきで子袋にジャムをいれてくれる。

そこで、エリオットがちいさな背をのばしてカウンターに顔をのぞきこませた。

「お姉さんがこのジャムぜんぶつくってるの？」

お姉さん、という言葉にまず気分をよくした女性は「そうだよ、ぼうや」と微笑をかける。

彼女の返答に、エリオットはすごい！と大きく声をあげた。

「わあっ！ 父上のだいすきなジャムをお姉さんがつくってるんだあ！　すごいや！」

「父上？」

その言葉に首をかしげた女性が、エリオットの顔をじっと眺める。そして、なにかを思い出したように顔を明るく輝かせる。

「まあ！　まさか、いつも来てくれる綺麗なお兄さんの子どもかい！？」

「たぶんそうだよ！　だって、父上は綺麗だし、かっこいい、優しいんだもん」

なにひとつ具体性のない解答だったが、父親似のエリオットの外見の効果もあってか女性は確信した様子で「あらあらまあまあ」と喜んだ。

「こんなにかわいい子どもがいたんだねえ。実はあの人を狙っていた子もたくさんいるんだけど、撃沈しちゃったねえ」

ちらりとわたしを見て、そういう。

わたしは慌てて。

「いえ……わたしは、その……」

「そうだよ、母上なんだ！」

「へえ……あんたもやるねえ、あんな良い男とやらやましい！」

エリオットの無邪気な声が追い討ちをかけ、女性のニヤニヤとした顔に追撃される。

確かにわたしは婚約を承諾したし、立場的にもエリオットの母親になったことには変わりはないのだが、なんだか納得がいかない。「物腰も良いし、気品もどこかしらあるし、貴族なんだろうねえ。」

あの年頃なら、子どももお嫁もいておかしくないわ……。ああ、あの年頃といえは今日の王子様の話知ってるかい？」

「い……いいえ、知らないわ」

王子、という言葉でドキリとした。

十中八九、話題の人物はクロードイスだとわかったからだ。

女性は夢見がちに両手をあわせて、夢想の世界へと旅立ちながら語る。

「お妃様が亡くなってから、新しい恋人もお妃もとらなかった王子がとうとう、婚約したらしいわよ！」

「ええええっ!？」

わざとではなく、本当にそんな声が反射的に出た。

そもそも承諾したのはわたしだが、それがその日のうちに国民にまで知れ渡っていることに驚いたのだ。

女性はいま誤解してくれたようで、誇らしげに手をぱたぱたとふる。

「あ、おどろいたね？ でもね、さらに驚くことがあるのよ！」

「ああ……ええと、なにがですか？」

「それが婚約した相手はかの勇者、ケンスケ様のお母上らしいわよ！ あーあ、王子が熟女好きだったなんて知っていたらあたし、猛

アタックしてたのに！」

「じゅく……!？」

驚きの単語に、開いた口がふさがらなかった。

「だって、ケンスケ様は王子と同年。そのお母様なら、相当お年を召しているはずよ。まあ同じ年齢だとしても、あたしなんかじゃあ今の亭主が関の山だけれどもねえ」

「ええええと……思っているよりは、お若いかもしれませんよ……?」

いくら子持ちとはいえ、まだ24歳のわたしには衝撃が強すぎる噂だ。

そもそも、王子はあっちの世界とこっちの世界の時間のズレとい

う重要すぎる話を国民に伝えていない。今この場に彼がいたら、追及していたかもしれない。

「ああ、実年齢よりはお若いかもしれないわねえ」
外見の話ではない。

「い……いえ……そうではなく」

「ではなく？」

女性の瞳がじっとわたしをみつめた。

わたしは、ぶわっと全身から汗が吹き出たような気分になる。

「……イエ、ナンデモアリマセン」

まさか素性をいうわけにもいかず、一人歩きする噂話にがつくりと肩を落とすのだった。

というわけで、わたしは先の出来事に若干落ち込んでいる。

「あ、母上！ なにか売ってるよ！」

そんなわたしの心中を知ってか知らずか、エリオットは好奇心旺盛にもひとつの露店を指差す。

そこで売っていたのは、揚げ芋のようなお菓子でひとつの串に大きい塊が3つ連なっていた。

「ひとつ、買ってみる？」

「うん！」

買ってみると、ちょうど揚げたてでホカホカと湯気が出ていた。

おいしそうである。

「うん、おいしいよ！ 母上もたべてみる？」

食べかけを手渡され、促されるまま咀嚼する。

ふんわりとケーキのような甘さのあとに、お芋のほっこりとした味と触感。わたしのいた世界ではいわゆるB級グルメというものに該当するだろう。

「おいしいね」

「うんっ！」

木製のベンチに腰掛け、ふたりでのんびりと広場の様子を眺めていた。

広場の周りにはいろいろな店があり、たくさんの人間が出入りしている。舞を踊っている女性や、歌を歌う男性。芸を披露している集団……それらで、にぎわっていた。

「……………あら？」

いろいろな花を取り揃えている店のすぐ近くに、ちいさな女の子がいた。

濃い茶色の髪を無造作にたらし、緑の瞳をしたかわいらしい6歳ぐらいの女の子。

片手にはバスケットが握られており、白いスイセンの花がぎっしりとつまっている。

女の子は道を行く男性に声をかけ、素通りされるをめげずに繰り返していた。

あんなに小さいのに、働いているのだと思うといってもたってもいられなくなって、気がつくとなたしは女の子に話しかけていた。

「こんにちは」

「……………」

疑わしい目線をそそがれたが、にっこりと微笑みお金を手渡す。

「お花、売ってくれる？」

戸惑ったような様子をみせていたが、こくりとうなづく。

わたしは一輪、スイセンを手に取り「ありがとう」といって、エリオットのもとへと戻ろうとしたが。

後ろから、女の子がついてきた。

「……………あれ？」

どう考えても、わたしのあとをついてきている。

（お友達ほしいのかしら？）

一言も話さなかったことから、もしかしたら内気な子なのかもしれない。友達もそんなにいないとか。

エリオットも同じ年ぐらいの子どもと触れ合うことなんてめったにないから、良い機会かもしれないと思った。

「ねえ、あの子はエリオットっていうんだけど……………お話してくれる

かな？」

内緒話をするように女の子に語りかけると、彼女は目をぱちぱちさせていた。彼女はエリオットに視線をうつして、彼を指差して視線で問いかけてくる。

『あの子？』

「うん、そうよ」

女の子は無言でエリオットに近づく。ベンチの上でぷらぷらと足を遊ばせている前のエリオットの前に立ちはだかった。

そう、まさしく“立ちはだかる”という言葉がふさわしい態度。

「きみ、だあれ？」

「……………」

「ボクはエリオットだよ！」

「……………」

「どこから来たの？」

「……………」

「なにしてたの？」

「……………」

駄目かもしれない！

頼んだ身だが、人選を間違えたかもしれないと後悔の念が押し寄せてくる。

女の子はなにひとつ話さない。子どものすごいところは、片方が何も話さなくて会話が成立するという点だが、それもいつまで続くかわからない。

「ええと、家族はちかくにいるのかしら！？」

耐え切れずに、ふたりの間に入り込んで女の子にたずねた。

ここで話さなくても、近くにいるのであればなにかしら救いにはなるだろう。

「……おとうさん」

驚いたことに、しゃべってくれた。

たどたどしい、そして鈴が鳴るようなかわいらしい声。

「でも、いまいない」

「母上はいないの？」

エリオットが聞いた。

少女は首をよこにふる。

「さいしょからない」

「……ボクといっしょだね。ボクも、母上がいらないの」

双方、うつむいて黙り込む。

子どもなのに、重苦しい雰囲気になってしまった。

話題が暗い！

わたしはまた慌てて、先ほどかった串を指差す。

「そうだ！ あなた、これたべる？ おしいわよ」

我ながら、かなり苦し紛れの言葉だったが、女の子はお腹が空いていたようで、きゅう、とかわいらしい音が聞こえたあとおずおずと手をのばして食べ始めた。

夢中で食べている女の子の頬がほんのり赤くなっている。おいしいようだ。

直接的な反応が返ってこなくても、わかるもんなんだなあとはほえましくなる。

「おいしい？」

返事は返ってこなかったが、ちいさく女の子がうなづいて、それがまた可愛い。

女の子がいたらこんな感じなんだろうなあ、と思った。しばらくそうしていると、女の子の手がふと止まる。

「……………」

スイセンをもう一輪手渡され、ちいさな歩幅で走り去る。

その足取りの先には、大柄な男性が待っていて、笑みを浮かべた男性は女の子の背をそつと片手で押していつてしまう。

「お父さんなのかしら？」

親しげだし、そうなのかもしれない。

「ふしぎな子だったね、母上」

「そうね」

ふたつの影を見送っていたが、日も暮れてきたのでわたしはエリオットに「そろそろ帰ろうか」と声をかけた。

エリオットの手をひいて、歩き出したとき独り言のようなちいさな声が聞こえた。

「また会えるかな」

また会えるよ、心の中でわたしは勝手に返事をする。

ちなみに。

エリオットとわたしが、その無口で不思議な女の子と再び会えたのはその翌日のことだった。

小学1年生だった息子は空っぽの仕事場を見て怒っていた。（後書き）

女の子の名前、どうしよう…。

こっそり募集中です。誰からもしなかったら、自作自演するしかない自分イタイ。

今回も、読んでいただいております！

小学1年生だった息子は己の力を最大限に出して走っていた。

「父上、ただいまもどったよ！」

「可愛いエリオット、お帰り」

エリオットと城へと戻るとすぐに、クロードィウスが出迎えてくれた。

ふたりは数年ぶりにあった親子のように、オーバーリアクションだと思っぐらいの動作で再会の抱擁を交わす。

それから、エリオットの両頬に軽いキスを与えた。

「あのねあのね、すっごく楽しかったよ！ ジャム屋のお姉さんは優しいし、花売りのふしぎな子にもあったんだ！」

「そうかそうか、よかったね。エリオット」

えらいえらいと、頭をなでる。エリオットもすっぐうれしそうだ。

わたしがその様子を微笑ましく眺めていると、その視線に気づいたのかクロードィウスが。

「ああ、愛する婚約者^{ハニ}にもしてあげないと、嫉妬してしまうかな」

「いいえ、いいです！」

両手を広げて熱い抱擁をしようとするクロードィウスから数歩後退する。

「そんなそんな、遠慮しなくても良いんだよ。私の抱擁を受けられる人間なんて、めったにいないんだからね。光栄に思いたまえ」

「わ……わたしは、この国でのあいさつの仕方に慣れていないので、遠慮させていただきます！」

嘘はついていない。

そういうと、クロードィウスは両手を下げて「ふむ」と考えこんだ。どうやら、諦めてくれたようだ。

わたしはほっと胸をなで下ろした。

「じゃあ、母上のお国ではどんなあいさつをするの？」

エリオットが首をかしげて聞いていた。

この国以外の文化に興味があるのだろうか。

わたしの国についての話はどこまでして良いのかわからなかったが、この場にはクロードイウスもいるし、大丈夫だろう。エリオットに言っではいけないことだったらすぐに静止がかかるはずだ。

それに、彼も興味があるのかわたしの言葉を薄く微笑んで待っている。

「ええと、この国みたいに親密度でやり方は変わるけれど……」

本当に初対面のひとだったら“はじめまして”って言って、腰を少しおっとお辞儀をするわ。これは、場面や気持ちがかもっているかどうかで角度が変わる。元々は外国のあいさつだったけど、ビジネスの場では握手をするときもあるかな」

言いながら、腰を折ってお辞儀のポーズをとる。15度、30度、45度。

高校時代、ビジネス実習の授業でやったことを思い出しながら説明をする。何年も前のことなので、いささか知識が危ないが。

“おじぎ”ってへんなの！ 父上もそうおもうよね！」

「ああ、そうだね。似たようなものもあるが、こちらでは貴族や王の屋敷の使用人がする風習だからね。そういう風に使い分けるのは不思議だ。では、恋人同士や夫婦、家族はどうなんだい？」

「何もしないわ」

あっさりとそう言ったわたしに、ふたりはとても驚いた反応を返す。

「ええっ！ だって、好きなひとなんだよ？ はじめての人はちゃんとあいさつするのに、どうして好きなひとにはそんなひどの？」

「エリオットの言う通りだね。初めての人間ほど態度が丁寧だなんて、おかしい話ではないか」

「ええと……その……」

確かに、言われてみればおかしい話かもしれない。

この日本人独自の風習をうまく伝えるために、わたしは頭を必死で動かして考える。

こちらでは、より親しい人間ほど接触する風習が多い。だけれども、日本は違う。

「初めての人間はおもてなし……つまり相手を不快にさせないようにいろいろな気遣いをするけれど、親しい人間ならちよつとぐらい嫌なことをしてしまっても笑って許してくれるでしょう？ ただ一言“おはよう”って言ったり“おかえり”って言ったりするだけで、気持ちが伝わるのよ」

「なるほど、逆なのだな」

異文化に対しての体勢がついているのか、理解力が高いのかはわからないが、クロードィウスにはこの微妙な日本人の考えがすぐに伝わったようだった。

「思えば、こういうのは信頼関係で成り立っているのね。形にしながらも伝わるから、あいさつでは抱き合ったりキスをしたりする必要はないのよ」

エスカレートすると、帰ってきた相手に対して“ん”で終わったり、返事すらない日本の悲しい夫婦現実の未来は伝えないことにしよう。我が家ではそれはなかったが。

「ふむ、理解すると面白いな。まあ、私としてはそんな冷めた夫婦仲になりたいとは思わないがね」

そういつて、クロードィウスは右腕をわたしの腰へ回して抱き寄せた。

「ひゃ……っ！」

バランスを崩して、以外にもしつかりとした彼の胸に寄りかかる。

「うん、やはりこちらの方が良いな」

左手でわたしの手をつかんで、顔を覗き込む。

「見ず知らずの他人よりも、私に奉仕してもらいたいものだが……ね」

「……………っ！」

青い瞳がすぐ目の前にあって、彼の甘い吐息が鼻をくすぐる。

これは絶対にあいさつでないことはわかったが、しっかりと腰を

抱かれてしまつてちよつとやさつとじゃ逃れることができない。

「あの……ちよつと……やめっ！」

「え、なんで？」

さらに強く抱き寄せられ、耳元にささやかれる。

その蜂蜜のように甘い声に、わたしの意志に反して、背中がぞくぞくとする。

「エリオットが見てますし……っ！」

なにより子どもの目の前でこんなことをする親がどこにいる。

エリオットだって、今日会ったばかりの女性が自分の父親と抱き合っている様子なんて絶対に見たくないだろう。

だが。

「えへへ、父上も母上もなかがよくてうれしいなっ！」

どうしよう、喜んでは。

この国は、わたしが思っている以上にいろいろとオープンなのだろうか。城内でも街でも見てはいなかったが、外国のようにそこら中でキスをする男女だつてたくさんいるのかもしれない。なら子ども目の前でキスをしたり、抱き合つたりするのにもワリと理解があるのか。それなら、どこまで良いのだろうか。いや、それよりもこの国の文化に慣れていないわたしの心情はどうする。

水に上げられた魚のように口をぽくぽくしながら、顔を真っ赤にし、わたしはめまぐるしく思考していた。

ここでいっそ、この国のスタイルに慣れておくべきだろうか。

なんだか変な方向に覚悟を決めた瞬間だった。

「クローディウス・ディナン・シンフォニウス」

十数時間ぶりに聞いた、クローディウスのフルネームを呼ぶ声が響き渡る。

髪の毛が額にはりつき、肩を激しく上下させている健祐がそこにいた。

「別名、バカ王子」

「ああ、ケンスケではないか。どうした？ そんなに怒って。それでは、エリオットもハニーも怖がってしまうのではないか」

「いいから、仕事に戻れ。素直に仕事場に戻ってくれたら、笑顔でも泣き顔でも見せてやる」

そうして健祐はわたしを抱き寄せているクローディウスを引き離す。

べりっ、という言葉が似合うほどの勢いの良さであった。

いや、それよりもいつも穏やかな息子がこんな怖い顔をするのにわたしは驚いてしまった。この王子なら納得もいくが、息子は大変な苦勞をしているようである。

「あっはっはは。嫌だなあ、そんなに引っ張ることないではないか。首が絞まってしまうぞー」

「いっそのままシメてやろうか……」

驚いたことに、素直に王子は抵抗するそぶりなど見せずに息子に襟首をつかまれて、ずるずると引きずられている。

「ああ、そうだ。大切なことを伝え忘れたけど」

もうすでにずいぶんと遠くにいるクローディウスが少し大きめの声でいった。

「明日も、お買い物よろしくね。今度は、ブルーベリーのジャムが良いかな」

いつの間にか買ってきたジャムの小瓶を片手に、朗らかな顔でそう告げたのだった。

「……さいしょから言って欲しかったわ」

二度手間ではないか。

いや、それよりもひとを堂々と使いつ走りにする彼に感心すべきか。

もう姿は見えなくなっていたが、わたしはクローディウスと健祐

の去っていった方向を呆然とみつめてそう呟いたのだった。

でもまたあの女の子に会えると思ったら、悪いことではないだろうと思う。

（名前、聞きそびれちゃったしね）

明日が楽しみになって、笑みが零れていると、ふいにエリオットがたずねてきた。

「ねえ、母上」

クロードィウスより濃い青の瞳がじっとこちらをみつめてきた。

「母上のお国では好きなひとほどなにもしないっていったけど、ふあんじゃないの？」

突然そう言われて何の話か一瞬理解できなかったが、すぐにさきほどのあいさつの話の続きなのだとわかった。

「そうね……不安になる人もいるけど、わたしはそんな風には思わないわ。一見、愛想がないように思えても実は心優しいっていうひとだっているんだから。お互い好きなんだって、わかっていれば不安になんてならないかな」

左手の指輪をなでながら、懐かしい後ろ姿を思い出す。

ときおり見せる不器用な笑顔が可愛かったな。

わたしの答えに納得がいかないのか、エリオットは押し黙ってしまった。

「……変かな？」

しゃがみ込んで、エリオットと同じ目の高さで聞いてみると俯いたエリオットが聞こえるか聞こえないかの声量で。

「……へんだよ」

その、そっぽを向いてしまったような態度が可愛くて、わたしは小さく笑って。

「そうかもね」

頷いた。

次の日、わたしとエリオットはまたイース・タウンへと来ていた。目的はもちろん、クロードィウスに頼まれた買い物だ。

昨日は夕方近くにやってきたが、今日は昼前。

白い光とさわやかな風が街を包み込んで、とても清々しい。

ジャム屋に行くと、わたしたちの顔を覚えていた昨日の女性が笑顔で迎えてくれた。また何か話をしようとしていたが、昼前の時間帯はかなり混み合らしく、彼女は諦めて仕事に専念することにしたようにわたしは胸をなで下ろした。

そしてまたあの広場のベンチで露店で買ったお昼ご飯のパンをふたりで食べていると、昨日の少女が少し離れたところでこちらを見つめていることに気がついた。

目が合うと、すっと物陰に隠れてしまう。その様子が警戒している小動物のようで、可愛らしい。

わたしは少女が逃げ出されないように優しくほほえんで、小さく手招きをした。

そうすると真意をはかるような、どこか戸惑っているような様子で少女はすこしずつ近づいてきた。リスかうサギを彷彿とさせる。

「こんにちは」

目の前まで来た彼女にそう声をかけると、一瞬ビクリとして一歩後ろに下がったが、なにもしないとわかるとまた一歩足を元の場所に戻した。

「あなたも食べる？」

そう聞くと、少女はちいさくうなづく。

新しいパンを手渡すと、ちいさな腕がのびてそれをつかんだ。

その場で食べようとする少女に、わたしは自分の右隣のベンチをぽんぽんと叩く。

「となりにいらっしゃいな」

「……………」

少女はなにもいわなかったが、了承してくれたようで小さな身体をイスの上にあげた。

それから、無言でパンを食べ始める。

「そういえば、あなたの名前聞いていなかったわね」

ふ、と少女のパンを食べる手と口が止まる。なにを言っているのかわかっていないような表情だった。

「なまえだよ？　きみのなまえってなあに？」

エリオットがそう聞くと、少女は首をちいさく左右にふりはじめる。

「名前がないの？」

聞くと、そういうわけではないと首をふる。では、どういうことなのだろうか。

「でも、名前を知らないとあなたを呼べないわ」

そういったあと、少女はじつとわたしの顔を見つめて、あの可愛らしい声で言った。

「……すきによんで」

少女の真意はわからなかったが、本人がそう言うのであればその通りにしよう。

「そうねえ……」

腕をくんで、数秒考える。

健祐がお腹に宿ったのがわかったとき、女の子の名前も考えたことを思い出した。

“素直で、正直で素敵な子になるようにという意味の名前だ”

名前に関する本を手にながら、背中を向けてそう言った彼。懐かしい気持ちになり、指輪にふれる。

そうだ、この名前にしよう。

「^{マミ}真実はどう？」

あまり聞き慣れない音なのか、少女は首をかしげる。

「真実っていう意味」

言葉は少ないが、その行動はとても素直で正直。だから、これが似合うと思う。

「まみ……」

「うん、マミ」

少女は口を尖らせてうつむくと、手にしたカゴから一輪、スイセンの花を取り出した。

「くれるの？」

こくりと首をたてに動かした。

「ありがとう」

そう言って受け取ると、マミは頬を赤らめた。

その様子で、わたしはこの名前が彼女に受け入れられたのだと思っ
て安心した。

「ねえねえ、マミ！」

さっそくエリオットがマミの名前を呼んだ。

「マミの父上ってどんなひとなの？」

さきほどからずっとそれが聞きたかったのか、興味深々の笑顔で聞いた。

「ボクの父上はね、やさしくて、きれいで、すごいんだ！」

それから、クロードイウスのことを嬉々と話す。

ふざけた王子だが、エリオットにとっては尊敬する良い父親なのだ。

「エリオットはクロー……じゃなくて、お父さんが大好きなのよね」

いくらなんでも本名を言ったら王子だと察することができるだろうから、言い直した。

エリオットは、本当に誇らしげにはじけんばかりの笑顔で頷く。

「うん！」

「ママはお父さん好き？　そういえば、昨日一緒にいたのはお父さんなのかしら」

聞くと、ママは目をすっと細めた。

（あれ……？）

ママの反応に戸惑った。

もしかしたら、仲が良くないのだろうか。

いけないことを聞いてしまったかとも思い、血の気が引いてなんとか自分の発言をフォローする言葉を探していると、ママが動いた。彼女は急いだ様子で手にもったパンを食べ始めて、ベンチから立ち上がって歩き始めてしまったのだ。

「あ……ママ？」

呼ぶと、ママはふりむいて小さくいった。

「……おとうさんすき」

それから、小走りに走って行ってしまおう。

その先にいるのは、背の高い細身の男性。昨日一緒にいた男性とは違う人間だった。

でもその細身の男性も柔らかく微笑んで少女をみつめると、ふたりでどこかへ行ってしまい、その姿は見えなくなった。

お父さんが好き、ということは深刻な関係ではないのだ。わたしの心配は杞憂に終わったのだと思って、安心した。

「やっぱりふしぎな子だね、母上」

「ええ……」

でも。

わたしは、ママが去っていった方向が気になって後ろ髪が引かれる思いになる。その原因がなんなのか特定できなくて、わだかまりが心の中にずっしりと残る。

嫌な予感がする。でも、それが何かはわからない。

「母上？」

「……なんでもないわ、行きましよう」

エリオットの手をとって、歩き出した。

わたしたちは気づかない。
道行く一部の人間がマミに向ける、冷たい視線とその意味を。

小学1年生だった息子は己の力を最大限に出して走っていた。(後書き)

複線はりすぎた…。

そして、遅くなりました。すみません。

女の子の名前を考えてくださったあさるとかん様、ありがとうございます！

み：見捨てず、どうかおつき合ってくださいませ。

ご感想・突っ込み等お待ちしております。

小学1年生だった息子はぐったりと机に突っ伏していた。

わたしとエリオットはイース・タウンから帰った後すぐに、クロ
ーディウスの自室へと呼ばれ、足を踏み入れた。

彼の部屋は客室であるわたしの部屋よりもずっと質素で、それで
いて上品だった。

時代を感じさせる花の彫刻が彫られている艶やかな木製のアンテ
ィークのような家具が並んでいる。

しかし、なにより驚いたのが本の多さだ。

壁という壁に本棚が並んでおり、紙特有の香りが部屋中に満ちて
いる。

まるで巨大な図書室だと感心してしまった。

本が好きなのだろう、わたしたちが部屋に入ったときも彼は机の
上に分厚い本を広げて頬杖をつき、文字を目で追っていた。

「ごくろうさま、おかえり」

「ただいま、父上！」

小走りにエリオットがかけよって、クローディウスに抱きつく。

そして、再会のあいさつである小さなキスを交わす。

「昨日、今日と城下町へ行ってもらったけど、どうだった？」

「エリオットにお友達ができたわ」

わたしはマミのことを彼に伝える。

スイセンの花を持った、あの不思議な少女のことを。

彼はゆるやかな笑みを浮かべてわたしの言葉に耳を傾けていた。

わたしの話が終わると、すこしだけ目を細めてエリオットに話しか
ける。

「エリオットは、マミという子を見てどう思ったのかな？」

「ええとね……」

それから、難しい顔をして考えこみ、悲しそうな顔をして答えた。
「ボクとおなじぐらいの子でも、働かないといけないのはかなしい

から、この国をもっともつとゆたかにしてみんなが笑顔になれるようにしていかなきやいけないと思う」

「うん。――それで？」

クロードィウスに促され、たどたどしくも言葉を続ける。

「ボクがあの子みたいに働かなくても良いのは、ボクのしょうらいにせきにんがあるからなんだ。ボクがこの国のみんなを導くりつばなおうさまになるために、ボクはいま苦しいおもいをしていないの。だから、働かなくて良いの。だから、ボクはおとなになったら、マミみたいな子をひとりでもなくすために、かんばらなきやいけないんだ」

わたしはエリオットの回答を聞いて驚いた。

まだ6歳程度の小さなエリオット。

どうして自分が安全な王城に住んで、高級な食べ物を食べて、立派な服を着ていることへの意味をちゃんと知っている。

でも、それと同時に胸が痛い。

こんな小さな子から“責任”という二文字が出てくることが悲しいのだ。

それは、エリオットが将来王としての重圧に耐えて生きていかなければならない事を意味しているのだから。

「うん、正解だ。これ以上ないほどの、立派な答えだ」

彼の褒め言葉にエリオットは顔をほころばせる。

「はい、父上！」

「可愛いエリオット、君は本当に賢くて偉い子だ」

立ち上がり、切ないまでの眼差しを自らの息子に向け、彼はわたしへと歩み寄った。

「そう思うだろう、ハニー？」

「……ええ、そうね」

わたしの返事が芳しくないのは、レールの上しか歩くことの出来ないエリオットの未来を危惧し、哀れんでいたからだ。

そのことで頭がいっぱいになっていたからこそ、わたしは次に言

うクローディウスの言葉にすぐに反応することが出来なかった。

「ねえ、ハニー。いま、子どもをつくろうか」

「ええ、そうね……って……え!？」

するりと、クローディウスの手が腰へと回され、瞬きする暇もなく暖かな温もりと彼の匂いに包まれる。

なにを言われたのかも、なにをされたのかも、わからなかった。ただ、呆然と手触りの良い布と白い肌をみつめている。

頭上で、さきほどと変わらない調子でクローディウスの声が聞こえる。

「この言葉が、どういうことかわかるかい？」

「ど……どうということって……」

男女という生き物が新たな命を育むためにするための行為は、どう考えてもひとつしかない。

健祐という子どもがいる以上、嘘をつく必要などないし、クローディウスだって経験がないはずはないだろうが……。

(それを堂々と子どもの目の前で言うの!?)

しかも今。

いくらなんでも幼い年頃で両親のそんなシーンを見てしまったら、いくら天使のように可愛らしいエリオットも心にキズがついてしまう。場合によっては、性格が曲がってしまうかもしれない。

わたしが中学生のときに「ちょ……だめっ」と母が父に言ったあと、寝室へ消えてそれから音が聞こえなくなったのを、少し離れた自分の部屋で聞いてしまったときは、なんとも言えない感情を持ってしまったものだ。

顔の温度が上昇するのがわかる。

「そういうことは、いまじゃなくて夜にしてください……! とうか、わたしは……!」

あなたとそういうことをしたいわけではないんです。

焦ってそう言おうとしたが、エリオットの言葉によって遮られた。

「……ほんきななの？ 父上……」

「ああ、本気さ。見たいならここにいっても良いけど……ね」

背中にある衣服のチャックに手が伸び、じじじ、とさげられるのがわかった。

首筋に軽いキスを交わされる。クロードィウスの柔らかくて薄い唇の感触が、脳髓を刺激する。

思わず流されそうになる意識を押しとどめて、抵抗をする。

「……わたしはやるなんてっ！」

「先ほど返事をしたではないか」

「いえ……あれはっ！」

ただの相づちです。

しかし、わたしの抵抗も虚しく衣服が脱がされ始める。

彼は背中にいるエリオットに問いかける。

「エリオット、ここにいるのかい？ いないのかい？」

視線さえ向けずに、言い放つ。

さきほど、この意味がわかるかい、と聞いた相手はわたしではなくエリオットだったのだ。

「……………」

エリオットは酷く傷つき、いまにも泣きそうな顔をして、拳を握りしめる。

それからうつむいて、唇をひきしめて歩き出した。

ちいさな風がわたしたちのすぐ横を通り過ぎて、部屋の扉が大きく閉じる音がする。

小刻みな足音が廊下を勢い良く駆け抜ける音が響き渡り、じきにそれすら聞こえなくなった。

それを確認したあと、クロードィウスはため息をひとつ。

「……やりすぎたかな？」

その一言が場に飲み込まれてしまっていたわたしの意識を引き戻し、濁流のように言いたいことが押し寄せてくる。さきほど以上に

顔の熱が高まるのがわかった。

「やりすぎです！ わたしは別に、あ……あなたと……そんなっ！」
それに、子どもの目の前でなんということを言うのだろうか。

「……？ ああ、君が誘ってくれるならやってあげても良いけど」
そのなんてことのない態度に、思わず手が出してしまった。

つまり、クローディウスの左頬を思い切りはたいってしまったのだ。
ぱしん、と軽くて小気味の良い音がした。

「あはは、痛いなあ」

「ふ……ふざけないでくださいっ！ あんな小さい子の目の前でそんなことをしようとするあなたもあなたですっ！ 何を考えているんですか！」

感情が高ぶり、激昂する。

「あー……」

わたしにはたかれた頬に手をそえて、そういえばそうだなあみた
いな反応を返すクローディウス。

それがまた、わたしの逆鱗に触れてさらに言い重ねようとしたら、
人差し指がのびてきてちょこんと唇に触れてきた。

「まあまあ、落ち着きたまえ。そうだね……君に期待をさせてしま
ったのはいささか悪いと思っているよ」

「き……期待なんて」

「あっははは、そうかい？ まあ、ハニーと床を共にしたら、いく
ら私でも寝首をかかれてしまうからね。なにもしないよ、安心した
まえ」

先ほど脱がしかけていた衣服を元通りに直してくれる。

彼の寝首をかける人間なんて存在するのかと疑問に思い、気にな
ったがそれを聞いている場合ではない。

「わ……わたしをからかってたんですか！？」

「君はちよっと、はやとちりさんだね」

っん、と今度は人差し指で鼻をつつかれた。

「こうしたら、エリオットが追い込まれるだろう？」

「追い込まれるって……」

そうさ、とクロードィウスは踊るようにその場で一回転をしてから、イスにもたれかかる。

「私が新しい子どもをつくるというってことはね、エリオットを次期の王位から降ろすという意味だからだよ」

「でもエリオットはあなたの問いに対して素晴らしい答えを返したわ」

ただの6歳の子どもならあんな答えなど出ない。これ以上ないほど、理想的な答えだった。クロードィウスだって、褒め称えていたではないか。

「ああ、素晴らしかったよ。これ以上ないほど、素晴らしかった。だけどね……」

そうして、笑う。

でもそれは、仮面のような笑み。

中身のない、外見だけの頬笑み。

「私はね、6歳の子どもが答えるような模範的な答えなんて求めていないし、中身のない答えを聞いたって満足もしない」

「……つまり、エリオットは間違っている？」

「そんなことは言っていないよ。答えとしてはあれが正しい。でも、答えを知っているだけで、公式を知っているわけではないんだ」

また、全てをわかったかのように言い放つクロードィウス。

「それを教えてあげるのは親の役目じゃないのですか」

子どもがいけないことをしたら、何が悪いのか教えてあげる。

どうしてそうなったのか、どうして悪いのか。

それが、親というものだ。

しかし、クロードィウスはかぶりをふる。

「王の役目は違う」

わたしとエリオットが持ってきた真っ白いスイセンの花を手に取り、その花弁をむしりとる。ひらひらと、花びらが床へとゆるやかに落ちていく。

「自分でわからないと、意味がないのだよ」

「――それは、王にするためですよね？」

「ああ、そうさ。そのために私がいて、あの子がいる
もいい。」

わたしは何も言わずにクロードゥスから背を向けて、部屋のド
アに手をかけた。

「エリオットに会いに行くのかい？」

わたしはその言葉に答えず、ちらりと真意の見えない笑みを浮か
べるクロードゥスに視線をむける。

重い扉に手をかけて半分ほど開けると、再び声がかかる。

「エリオットを君の世界へ連れて帰るのであれば、ケンスケに言う
と良い。君のしたいように、してくれるだろう」

どうしてそんなことを言うのだろうか。

「あなたは、エリオットを王にしたいのではないのですか？」

「もちろんさ。だから、連れて帰ってもかまわないと言っているの
だ」

「……本気で連れて帰りますよ」

「うん、どうぞ」

わたしの自由にして良いと言われているはずなのに、どうしてか
腹立たしい。

王にするためにエリオットが必要だというのに、彼の行動は矛盾
してばかりいる。

「本気ですからね。……わたしの夫はとても素敵なのになのに、あ
なたは最低です」

「でも、彼はもういないのだろう？」

「います。ずっと……わたしの中に」

そう言い捨てて、わたしはクロードゥスの自室を去る。

廊下を迷うことなく突き進み、目的の部屋の前までたどり着く。
その扉の前で、わたしは一人つぶやいた。

「本気よ……本気、なんだから」

小学1年生だった息子はぐったりと机に突っ伏していた。（後書き）

喧嘩のパターンは一緒だけど、ようやく話が動き出してきた。一安心。
どうか見捨てずおつき合ってくださいませ。

感想・突っ込み、お待ちしております。

※10／28少し修正しました。

小学1年生だった息子は仕事が山積みの現実と向き合っていた。

「エリオット、良い？」

深呼吸をして、意を決して扉の向こうの人物へと語りかける。

わたしはエリオットに伝えるのだ。

もう、こんな厳しいだけの世界にいらなくても良いのだと。

友達もいなく、父に厳しく当たられるだけの世界から抜け出すことが出来るのだと。

それをエリオットに伝えれると思うと、不安でもありどこか心が躍る。

また息子と一緒にふたりで、がんばって生きることが出来るのだから。

だが、返事はない。もう一度声をかけ、聞き耳を立ててみると気配があつて起きていることはわかる。

このことを早く伝えたい。

だから、一言入室することを伝えてからわたしはその重い扉にそつと手をかけて押した。

エリオットの部屋の中は薄暗く、ぼんやりと火の弱々しいランプの光がゆらゆらと揺れている。

エリオットは、ランプの前で静かに本を読んでいた。

わたしが部屋に入っても、その視線は本から逸れない。

「エリオット」

できるだけ、優しい調子で名を呼んだ。

そこでようやく、エリオットは顔を上げてまるで人形のような瞳で返事をする。

「もう終わったの？」

「そんなこと、していないわ」

そう言っても、ショックが大きかったのか信じていない様子で目を伏せている。

「クローディウスは冗談のつもりだったのよ。ね？」

「父上は、そんなじょうだんいわない」

エリオットは本気で信じている。

「父上は、いらなかったらきりすてるおひとだもの」

「そんな……」

でも、言われてみるとそうかもしれないと考えてしまう。

あの飄々とした態度の裏に、非情に冷酷で残酷な面が彼には確かにあるように思える。

もし、もしもだ。エリオットが自分の予想通りに育たなかったら、彼はエリオットを切り捨ててしまうのではないだろうか。

背筋に冷たいものが走った。

もし、もしそうなら……。

その先の、あまりにも悲しい未来を想像してわたしは唇をかみしめる。

そうしてできるだけ、落ち着いてエリオットに語りかけた。

「それよりエリオット、大事な話があるの」

「大事な……はなし？」

膝を折り、視線をエリオットに合わせる。

「そうよ。あのね、わたしの世界に行きましよう？　ここより生活は大変だけど、あなたの人生をあなたが決めることができる。あなたは、自由になれる」

エリオットは何を言われているのかわからない様子で、きょとんとして笑顔を向けた。

「なにをいっているの？　ボクは自由だよ」

「ちがうの、そういう意味じゃないわ。何かを強要されることも、縛られることのない世界へ行くの。あなたが、あなたのままでいられるのよ」

引き寄せて、抱きしめる。

ちいさな身体は少し力を込めただけで折れてしまいそうなくらい華奢で、暖かい。

「ははうえ……ボクは……」

「もう苦しい思いなんてさせない。わたしが、約束するわ」

エリオットにとって、これは必ずしも最善ではないかもしれない。だけど、確実にここにいるよりは良いのだ。

安心させるように、大丈夫。と語りかける。

エリオットの手が、きゅっとわたしの衣服をつかむ。

「父上は、もうボクのことなんていらないっておもっているんだよね」

無感情とも思わせる色のない淡々とした声色。

「王族の血が引き継げられるのなら、ボクはいてもいなくてもおなじなんだよね」

そうよ、とは言えなくてわたしはぎゅっとエリオットを抱きしめる。

「ボクの存在価値は、王になること以外……ないんだよね」

「そんなことないわ……っ！ あなたは、あなたっていうひとりの人間よ……っ」

自虐するように呟くエリオットの言葉を必死で否定する。

「わたしは、あなたを王にするだけだけの存在としてなんて思っていない。わたしの……子どもよ」

「母上……」

どこか戸惑うようなエリオットの言葉を、自分のいっぱい気持ち伝えられることを願って待つ。

そして、少しの沈黙のあと静かな声で小さな子どもはわたしに告げる。

「母上……ボクは……いけないよ」

その言葉に、わたしは衝撃を覚えた。

「どうして？ だって、こんな辛い目ばかり合って、友達だってできなくて……」

どこか焦るように必死で説得をする。

「最初は不安で慣れないかもしれないけど、徐々に溶け込むわ。誰

かに命を狙われることもない。幸せになれるのよ？」

「だって……父上のことがだいすきなんだもん。父上のきたいに、役にたきたい」

そつと、エリオットはわたしから身体を離す。

「ねえ、母上……」

「お兄さま」

彼女が行ってしまったあと、まるでタイミングを狙っていたかのように妹の声とノックの音が響いた。

「うん、入って良いよ」

了承すると、優雅に滑り込むようにクロエが入室してきた。

その表情はどこか余裕にも見て取れ、仮にも上位の存在である兄に対して敬いの感情など毛ほども感じさせてはいない。

「先ほど、一部始終を見させていただきましたけど……えげつないですわね。ケンスケが知ったら、きっと怒るに決まっていますわ」

「ああ、だからたくさん仕事を押しつけて部屋で休ませているんだよ。なんだかんだであいつは、自分の母上に甘い……というより、溺愛……いや執着、かな」

いきなり見知らぬ世界へと飛ばされた幼い少年にとって、暖かな母の思い出だけが心の支えだったのはクロードィウスもクロエも十分に知っている。

だからこそ20年近くの月日が流れていても、母親を忘れることなんてできなかったのだろう。

それがクロードィウスは少し羨ましい。

母親は生きていたが、愛情など注ぎ込まれた思い出などない。

物心がついたときには一人で、自分の身は自分で守らないといけなかった。

幼いながらも、クロードィウスは卓越していたのだ。

「それより、クロエは私に協力してくれるのではなかったのかい？
いろいろと根回しや協力をしてくれているから、てっきりそう考
えていたのだけど」

クロードィウスの言葉は無視し、クロエは近くにあるイスに腰掛
ける。スカートにシワがよらないように丁寧に着席するその様子ひ
ととつとも我が妹ながら美しいと思った。

「花売りの少女についての報告書があがっていますわ。お兄さまの
言う通りの内容ですけど、お聞きになりますの？」

「いや、いいよ。裏が取れたのなら、それで」

「わかりましたわ。この件はケンスケにも通しておきます。いざと
いうとき、必要でしょう？」

「うん、ありがとう」

それで会話は終わり、いつもならすぐに退室する妹なのだが、今
日にいたっては黙ってこちらを見つめ続けている。

「そんなに見つめられると、気があるんじゃないかって思うよ？」

「気持ち悪いことを言わないでくださいまし、違いますわ。……ど
うしてお兄さまは、あの方に仰らなかつたのですか？」

ああ、そのことか。と一瞬で理解する。

「王の子孫が道を外れたら、魔王になってしまうことかい？」

「わたくし達には、この縛りがある。逃れられない運命ですわ。だ
からこそお父様、お兄さま、わたくしを除いた他の王族は殺さなけ
ればなりませんでしたわ。どう考えても、あちらの世界へエリオッ
トを送ることなんて不可能ですのに。性格が悪すぎじゃあございま
せんこと？」

下手に希望を抱かせて絶望させる気か、とクロエは責めている。

性格が悪い、確かにそうだなと思うと自然と喉の奥が鳴った。

「王族は皆、性格が悪いのさ。例外なんてひとりもない」

「まあ、言ってくれますわね」

「しかも、皆ひねくれている。オマケに警戒心も強いから、なかなか心を開かないし本音を言わない。ちょっとやそつとじゃあ、心も折れない」

床に散らばったままのスイセンの花びらを一枚拾う。香りを楽しんで、接吻をするように唇にそつと当てた。

「うそ……」

わたしは、信じられなかった。

でも現実は無情で、その事実をわたしに突きつけてくる。

「嘘じゃないよ、“母上”」

にっこりと、無邪気にエリオットは笑っている。

「おばあさまも、道から逸れてしまったから魔王になってしまったんだ。国民を虐げ、殺し、税を巻き上げる。刃向かう者は全て容赦なく切り捨て、自らの欲に忠実になる。ほら、言葉の通りでしょう？ “魔”の“王”って」

くすくす、となにが面白いのか、エリオットは笑っている。
笑っている。

彫刻のように凍り付いたわたしに気づき、エリオットは慈しむかのようにそつとわたしの頬へと手をのばす。

「だからね、あなたの考えていることは無駄なんだよ“母上”。だってホラ、そうしたらボクはきつと狂ってしまうから。それに……ね」

すつ、と無機質な硝子玉のような目になった。

「“母上”はボクが可哀想なんて思っているいろいろと決めてたみたいだけど、ボクの意志なんてちつとも考えてないよね。ボクにとって

何が幸せなのか勝手に決めつけて、それをボクに押しつける。それって、どんな人間より迷惑で残酷だってわかってる？」

「エ……リオット……？」

目の前にいるこの少年は誰なのだろうか。

いままでの無邪気で純粋な面影は消え、冷酷で大人びた表情をしているこの人間は一体……。

「悪意のない善意こそ、迷惑で吐き気のするものはないよね。あなたはボクに取り入って権力を上げようとしたり、暗殺をして王位継承を自分の子どもにと企む貴族なんかよりもずっとずっと狡猾で汚い人間だね」

今までの舌足らずな口調は消え、話すその姿は世の中の醜さを知り尽くした大人そのもので。

「ねえ、ボクは所詮ケンスケの代わりなんでしよう？ 昨日今日会ったばかりの子どもにそう簡単に愛情なんて湧くはずないもんね」

「あ……あなた……は」

突然、わたしはこの人間に対して底知れぬ恐怖を覚える。

未知なものに対する純粋な恐怖が、わたしを支配している。

「はは、驚いてるっ。ボクがよい子で純粋で無邪気な子どもだって信じてたんだ」

口調を変えて、最初に会ったときのように元気で曇りのない子どものように言う。

「だって、こうしたら大人はみんな“ああ、なんて賢くてよい子なんだ。こんな子を持った王子はさぞかし恵まれているだろう”って思ってくれるでしょう？ 父上だって喜んでくれるものっ」

「なら今までの……」

「そう、ただの演技！ 大人だってするでしょう？ 心にもない言葉で褒めたり、自分に有益だから内心気持ち悪いって思っても仲良くしたり。ね？」

「だ……騙していたのっ!？」

叫ぶようにそう言うと、まるで心外だというように少年は肩をす

くめる。

「騙すも何も……よい子に見せたいゆえの行動なんて子どもでも誰でもするし、人間として当たり前前の考えだと思うんだけど」

なんということだろうか。

この少年は、自分を偽ることに少しも躊躇していない。人の顔色を伺っているわけでもないし、偽っている自分に対して嫌悪もしていない。

自分がそうしたいから偽っていると、堂々と言っているのだ。

卓越しているなんてものじゃない。

歪んでいる。

「こうやって素をさらけ出すと、父上に迷惑がかかるからやらないんだけど……。いい加減、あなたが迷惑になってきたからもういいかなって」

無邪気な笑顔が、さらに恐怖を煽る。

「息子の代わりを得て、あなたは今までに見たことがないぐらい生き生きとするようになったよね。別人じゃないかって思ったぐらいに。でも、それももうおしまい」

氷のように冷酷な言葉が、わたしに突き刺さる。

「この世界と王族の血に縛られているボクはそちらの世界へと行けない。行く気もない。ひとりで帰っちゃいなよ。どうせ、父上もあなたのことなんて好きでもなんでもないし、この世界にあなたの居場所なんてないんだから」

「……………っ!」

冷たい眼差しが、言葉がわたしへと突き刺さる。

「ボクは諦めないよ。父上がボクにとって足りないと思っているものを必ず見つけだしてやるんだ。さあ、はやく出て行って」

わたしは、もはやなにも言えなかった。

ただ、エリオットの言葉通りにその場から退場するしかできなかったのだ。

左手の薬指にある指輪に触れる。

（あなた……健祐……）

いまでも、ふたりに会いたい。

小学1年生だった息子は仕事が山積みの現実と向き合っていた。(後書き)

遅くなりました。いつも見ていただいてありがとうございます。

…私の大好きなうつ展開ですけど、需要ってあるのだろうかと考え
てしまう今日この頃。

ぐ…ぐだぐだでも、見捨てずおつき合いいただければ…と思います。

ご感想、突っ込み、お待ちしております。

※10／28少しだけ修正。

小学1年生だった息子は邪魔をしにきた王子の異変に気がついた。

あの後、わたしはまた城下町のあの噴水の前へと来ていた。

エリオットにもクロードィウスにも、誰にも会いたくなかった。城の中では誰かに会う可能性は高く、誰にも言わずに抜け出してきた。健祐には会いたかったが、警備の騎士に聞いてもどこを探しても行方をつかむことはできなかった。クロードィウスに聞けばすぐにでもわかるとは思ったが、誰にも会いたくないという想いと矛盾してしまうから諦めた。

ため息ひとつついて、真っ暗な夜空を背もたれにかかりながら見上げる。もう夜遅くなので噴水の周りにはひとはいなく、噴水の水しぶきの音だけがしていた。

どうしてエリオットはあんな子どもになってしまったのだろうか。同じ年頃だった健祐とは雲泥の差で、我が子を中心として考えていたわたしの世界はエリオットの豹変によって覆された。そうしていると、ふと、エリオットの無邪気な声が頭の中で、呪いのように繰り返し響き渡ってわたしを責める。

——ボクは所詮ケンスケの代わりなんでしょう？

嫌だ、ダメだ。これ以上は考えたくない。

告げられた言葉を拒もうと、脳が必死になって叫ぶ。考えるのをやめろ。現実から目をそらせ、と。

両手を合わせるようにしていると、左手の指輪の固い感触を実感した。

「わたし、ダメダメだね……」

向けた言葉は聞いて欲しい相手には永遠に届くことはない。だけれども、言わずにはいられない。こんなみっともないわたしの姿を

見たら彼は、なんて言うだろうか。呆れてしまっただろうか。それとも、怒るだろうか。いや、わたしの知る彼はそんなことはない。きっと――。

「あ……」

そこまで考えて視線を上げると――マミがいた。

彼女はいつもと変わらない、無表情でわたしを見下ろしている。いつからここにいたのだろうか。大の大人が泣いている姿なんてあまり子どもには見せたくなくて、うるんでいた涙を強引に袖でぬぐって明るく話しかける。

「こんばんは。こんな遅い時間にどうしたの？」

返事をせずに彼女はわたしの隣へと座る。

どう言っているのか反応に困っているのか、それとも言わべきことなんてないと思っているのか……。わたしは少し居心地が悪くて、それきり口をつぐんでしまう。

それからしばらく何も言わずにいて、噴水の水の流れる音だけが聞こえていた。けれど、やがてマミは、ゆっくりとこちらを向いて静かに言う。

「かなしいの？」

それはいつもの変わらない表情で、声色だったが確実にわたしを心配する色が混じっていた。ああ、氣遣われているのだ。

「……そう……ね。悲しい……のかもね」

「あの子がだまってたから？」

「え……？」

マミの大きい目がじつとこちらを見つめている。あの子というのはエリオットだろう。では、黙っていたというのは。

「気づいていたの……？」

彼女は無言で肯定した。

「にてるから」

マミに、ということだろうか。彼女はどこか寂しそうな目をして、そう語る。

「あの子がうらやましい」

「どうして」

「あなたが落ち込むぐらい、かなしんでくれるあの子がうらやましい」

「そう……」

「大人だってまちがえる」

「え……？」

彼女は年相応に見えない大人びた目で言った。そしてバスケットの中から、スイセンの花を一輪とりだした。

「だから気落ちする必要はない。あなたがそれでかなしくなる必要は……ない」

ふわりと、スイセンの香りがした。

そして思い出す。その言葉は、かつて愛する人が自分に向けた言葉によく似ていた。

“人間なんだから、大人だって間違える。問題はそれからどうするかだ”

普段は無口で不器用なあの子がたまに言う言葉は魔法のように、わたしの心を春の日差しのようにゆっくりと溶かしていった。

そう、こういうときあの子ならこういうに決まっている。そして必ず、もう一度がんばって元気づけてくれるのだ。

ママが彼のような意図を込めて言ったわけではないと思うけど、彼女が精一杯自分をはげましてくれたのだとわかるとうれしくなった。

考えてみれば、詳しい事情も話さずにいたのだ。まみはただ元気がないわたしを励まそうとしてくれただけ。

なんて不器用なんだろうか。思わず苦笑してしまった。ただ一言「元気を出して」と言えば良いのに、こんな遠回りをして。でも、わたしのために励ましてくれたのは純粹に嬉しい。

それが伝わったのか、すこしだけ。すこしだけママは目を細めて……わらった。

「よかった」

笑うことに慣れていないのか、ぎこちなくて、笑っているかどうかともわからないぐらいの微妙な表情の変化だった。でも、初めて見るマミの心からの笑顔に思えた。

「……こんな小さい子に心配されちゃうなんてね」

わたしは頭をなでて「ありがとう」と言った。どちらともつかず、薄く笑い合う。

自体は何も解決していないし、これからどうすれば良いかまだわからないけど……沈んだ気持ちは浮上した。そうしていると。

「母さん」

聞き慣れた声が、背後からかった。

驚いて後ろを振り向くと、荒い呼吸を繰り返して肩を上下させている息子がいた。

「健祐……」

「良かった、見つかった。心配……したんだ……」
手を差し出して「帰ろう」と彼は言う。

「……マミ!？」

心底安心したように近づく健祐に、マミは立ちほだかるようにわたしの前に立った。その目には、疑心と不審。

静かに黙って健祐を見つめていたマミは、一言だけポツリと呟くように言う。

「……英雄」

どうやら、健祐の顔はマミのようなちいさな子にまで知れ渡っているようで、マミの声も驚きが含まれていた。

それでもまるでわたしを守るようにして、わたしと健祐の間に立ちふさがっている。

「ねえマミ。この子は、敵じゃないわ。わたしたちに何も危害を加えない。安心して」

「……………」

なだめるようにそう言っても、ママは動かない。むしろ、睨むように健祐を見つめていた。

健祐のほうはというと、最初は目を丸くしてママの行動を眺めていたが、すぐにすっと目を細めて。

「君が“花売りの少女”だね」

ぴくり、とママの肩が揺れる。

「大丈夫だ。本当に、今はなにもしない。君にも——君の、お父さんにも」

その言葉に、ママはさらに睨みつける力を強くした。6歳ちかくの子どもが、どうしてそんな顔ができるのかと思うぐらい力強い、意志の瞳。

なにが起こっているのだ。わたしは、ふたりの間でしか伝わらない無言の会話を黙ってみるこしかできなかった。

「オレは彼女を迎えに來ただけだ。これは仕事でもなんでもない。だから……お帰り」

じりじりと後退したママはわたしをいちべつすると、小さく手を振って小走りで去っていった。そこで緊張感に包まれていた空気はほどけ、健祐は自重気味に笑いながら「帰ろうか」と言った。

「健祐……？」

考えてみれば初めて見る威圧的な“息子の仕事の顔”にも驚いたが、それ以上にそう言わないといけない自分の立場を皮肉っているような息子の態度が胸に痛い。

でもとうに大人になってしまった息子は甘えさせる暇さえ与えずに、わたしの手を引っ張って歩き出してしまふ。

「どうせクロードイウスのせいでしょ。あいつの言うことなんて、気にしないで」

それは当たっているが遠からず、という予想でわたしは息子になんの言葉も返すことはできなかった。

小学1年生だった息子は邪魔をしにきた王子の異変に気がついた。**（後書き）**

おおお：お待たせしました。

お母さん、ちょこっとだけ立ち直りました。

亀更新だと思いますが、よろしく願います。

感想・突っ込み等お待ちしております。

小学1年生だった息子は人身売買をしている集団について報告を受けていた。

それからわたしはエリオットには会っていない。

すれ違うように、会わないようにして日々を過ごしていた。

健祐は気にしてときおり顔を見せてくれていたし、クローディウスはこれまでの会話がなかったかのようなないつも通りの態度。

この間の出来事がなかったかのような感覚に襲われた。

だが、ときおりエリオットが廊下を歩く姿を目撃すると背筋が凍るのだ。そして逃げるようにそのまま、背を向けてしまう。

「いま、お時間よろしいです？」

突然、部屋にやってきたクロエはわたしにそう言ってきた。お茶に誘われたのだった。

広い中庭で優雅にお茶を飲む彼女。豪奢な扇を手にもち、きらびやかなドレスに身をつつんだ清楚な美女が目の前にいると、どうにもどぎまぎした。

「飲みませんか？」

「あ……ええ、いただくわ」

紅茶を飲む。リングの風味がした。おいしい、そう思って目をまたたかせているとクロエは笑って。

「それは、あなたとエリオットが買ってくださいだった紅茶ですわ」

エリオット、と聞いてどきりとした。

「そ……そうなんだ」

ぎこちなく笑って、黙ってお茶を飲む。さきほどしていた味は感じなかった。

しばらくの間、ふたりは無言だった。

そしてふとクロエは。

「それで、あなたはお帰りになりますの？」

なんで知っているのだ、という目をしてクロエを見ると彼女は扇

を口元にあてて。

「エリオットから聞きましたの。まったくあの子は、疑いようもなくお兄さまの子どもですわね」

「それじゃあ、あの子の本性も知っていて……」

「ええ、お兄さまや他の大人たちにはうまく隠しているつもりでしょうけれど……。わたくしは、あの子にとって例外ですから」

それよりも、とクロエは繊細なティーカップを丁寧に置いて、わたしの目をまっすぐに見る。

「どうしますの？」

「それは……」

決めかねている。そう言おうとしたら、言葉をさえぎられた。

「お謝りなさい」

立ち上がって、わたしの手をひっぱってそう言った。

あまりにも突然の行動に、わたしは驚いてその手をふりはらう。

「なにをするんですか」

「言っているじゃありませんの。謝りに行くんですわ、エリオットに」

「どうして」

脈絡のない彼女の行動に、苛立ちを覚えた。しかし、クロエは無をいわさない顔で。

「不快な想いを相手にさせなのであれば、相手が子どもだろうと大人だろうと謝らないといけませんわ。お兄さまは傍観者ですし、ケンスケはあなたに盲目的でとびきり甘いのですから、わたくしがあるに言うべきことは言うしかありませんの」

そして今度こそわたしの手首をがっちりつかんで、歩き出してしまう。

「帰る帰らないは別にして、善意の押しつけほど煩わしいものはありませんの。あなたがすこしでもエリオットと仲良くなりたいのであれば、謝るべきですわ」

それができないのであればお帰りくださいまし、と突き放すよう

に彼女は言う。

これまでほとんど関わりのなかった彼女の、そんな行動が理解できなくてわたしは戸惑う。

全体的に友好的な雰囲気を出しているわけでもない。けれども、嫌いであればこんなことを言うことはない。

わたしは、クロエという女性の内心を測りかねていた。

どうするかはわたし次第、という口調のわりには彼女はわたしに有無を言わずに、エリオットの私室の前につれてきて無遠慮にその扉を開けた。さすがは兄妹だと、場はずれだが感心してしまう。

「エリオット、入りますわ」

「もう入ってから言うセリフじゃないよね」

幼い矮躯をイスの背もたれにあずけて、冷えた眼差しでエリオットは言った。

その姿を見た瞬間、わたしは凍り付く。豹変としたエリオットが忘れられないのだ。

エリオットはわたしの姿をちらりと見ると、あざ笑うように言った。

「なんだ、まだ帰っていなかったの？」

辛辣とした言葉に、胸がずきりと痛む。

だがそんなわたしの心情を知ってか知らずか、クロエはわたしの背をおもいきり押して、エリオットの前へとつきだした。

「謝りにきましたの」

「謝る？」

はっ、と皮肉げな笑みを浮かべたエリオットは目を細める。

「このひとに、そんなつもりはないみたいだけど？　不本意だーっという顔しているよ」

イスのうえで足をくんで、見下すように彼は言う。

その姿に、正直わたしは恐怖していた。それと同時に、どうしてわたしが……という感情を持っていた。それを見透かされて、皮膚の表面が冷えついたのだ。

「それで“母上”は謝ってくださいるの？」

「それは」

「まあ、ボクとしてもそんな気がない人間に謝られても不快なだけだし？ それにボクのことを本当に思ってくれているのなら、さっさと帰ってほしいな」

いいどもったわたしに、勝ち誇った笑みを浮かべてエリオットは笑う。

「エリオット」

ぴしやりとクロエが静止をかける。

一気に不快そうな顔になったエリオットは、一回舌打ちをすると「それで？」と腕を組んだ。わたしの言葉を待っているようだった。

「あ……あの……」

言葉も決まらないまま、とにかくなにか言わないと思った。

どうしてここで自分が謝ることになるのだろうか。真剣に悩む。クロエの言っていた言葉を思い出す。

（不快な想いを相手にさせなのであれば、相手が子どもだろうと大人だろうと謝らないといけない……って、言っていた）

“人間なんだから、大人だって間違える。問題はそれからどうするかだ”

そのむかし、夫に言われたばかりの言葉を思い出した。

わたしは、間違っていた？

目の前の幼い子どもを見つめた。

わたしは王になるこの子の環境が、大人たちが許せないと感じた。そして幼い健祐とこの子を二重にしてかぶせていたのは間違いなかった。

わたしの価値観で、はかりにかけていた。

「あなたは、なにが幸せなのか勝手に決めつけて押しつけているって、言っていたわよね」

「……そうだけど、なに」

「それなら——ごめんなさい。あなたのこと、なにも考えていなかったわ」

わたしは、謝った。

いきなり頭をさげたわたしに、エリオットは驚いていた。表面的じゃない、心の底からの謝罪に戸惑っているように見えた。

「……なにさ、いまさらご機嫌取り？」

それにボクが望んでいるのは、あなたが元の世界に帰ることだ。別に謝って欲しいわけじゃない」

「わたしは、帰らない」

「なにそれ。子ども相手に意地になっているの？ それとも、この世界の暮らしが楽だから手放したくなくてボクに媚びているの？」

どこまでも辛辣な言葉に、なんだか苦笑がもれた。無駄なところ
でこの子は頭が良いな、なんて。

「言い切れないけれど、違うわ」

わたしが謝ったのは単純な理由なのに、頭の良いエリオットはまだわからないようだった。

「……本当にボクのことを考えてくれるのなら、目の前からじゃなくて世界から消えてもらいたいんだけど。それともなに？ 母性愛とやらでまた余計なおせっかいでも働いてくれようとしているの？ 言ったよね、この世界にあなたの居場所なんてないって。それでも厚かましく居着こうとするの？」

畳みかけるように言われた言葉に圧倒されそうになる。この子は計算してひとを傷つける言葉を選んでいるんだと、本能的に思った。「いまでも、あなたはわたしにとって気味が悪い。正体のわからない、黒いもやみたいに見えるの。触れたらなにが起るか、わからない」

これは真実だった。エリオットを見ると、どうしても拭いきれない気持ち悪さと不信感がつのる。子どもとは思えない、大人以上の思考に恐れを抱いている。

それでも、と続ける。

「これまでのわたしの行動で、あなたに不快な思いをさせてしまったのには変わりない。だからただ、謝りにきたの」

「……なにそれ」

本気で呆れたような様子で、吐き捨てるようにエリオットは言った。

「それでなにか変わるわけ？　ボクが“ああ、このひとも悪気があったわけじゃないんだ”なんてお涙ちょうだいなことでも思うと考えているの？」

静かにわたしは首をふる。

エリオットはけっして、そんなことを思わないことも予想はついていた。謝っても、わたしをこの世界から追い出そうと畳みかけることも。

「じゃあそれは、ただの自己満足ってことだね」

「……そうかもしれないわ。でもわたしはあなたに申し訳ないって言う気持ちが本当にあったから、謝ったの。帰らないと言ったのは、一時の感情だけで決めてよい事柄じゃないから」

そう伝えたあとのエリオットの顔は、どうにも表現しきれないものだった。氣にくわないというものと、狼狽えが入り交じったもの。「勝手にすれば。でも、ボクには関わらないで」

怒るように、背中をむけてしまう。

その姿にわたしはどことなく安心感を覚えて、ゆるく笑った。苛立ちを覚えているエリオットが、いまでも年ごとの少年に見えたのだ。

「ええ」

これからどうエリオットと関わっていくか先行きは見えないが、どこか前進したような気分になってわたしはエリオットの部屋から出ようとした。しかし。

「……それは、ちょっと無理ですわね」

「どういふことさ」

クロエが扇をぱちん、と勢い良く閉じて不適に笑う。

「これからあなた達おふたりは、また城下町へと行っていただきま
すの」

「なにそれ」

苛立ちを隠そうともせず、エリオットはクロエにかみついた。

「それにボクに命令できる権利なんて、ないはずだよ」

「うふ……それが、あるのですのよ」

冷笑をうかべたクロエに、背筋から鳥肌が立った。その口振り、
その自信。どこかの誰かを思わせるには十分な要素をはらんでいた。

「クローディウス王子のご命令ですの。エリオット、あなたにだっ
て逆らえるはずないでしょう？」

間違いなく、この王女もクローディウスの肉親だと確信した瞬間
であった。

小学1年生だった息子は人身売買をしている集団について報告を受けていた。

短いですが、ようやく投稿です。

さんざん悩んだので、あとで加筆するかもしれません。

ご感想・突っ込みお待ちしております。

小学1年生だった息子は仕事で城下町へと降り立った。

「父上がなにをお考えになっているのか、わからないよ」

それがわかれば、苦勞する人間なんていないだろう。息子しかり、わたししかり。

エリオットとわたしは再び、城下町へと降りていた。例の噴水の前で、はじめて出かけた日のようにふたりでパンを食べながら言葉を交わす。

「しかも今度は“数時間は帰ってくるな”なんて」

そう、今回の王子クロードイウスの命令はおつかいでも観光でもない。ただ一言「しばらく帰ってこないように」だった。

裏を返せば「何時間でも好きなようにふたりで過ごしてきなさい」とも取れるが、いまだにわたしとエリオットの距離感は気まぐしい常態では苦痛以外の何者でもなかった。別行動を取ることも許してもらえないらしく、わたしと幼子はただベンチの端っこと端っこにぎこちなく座っているという常態であった。

そんな命令無視すれば良い話だが、頑なにエリオットはクロードイウスの言葉を守ろうとしている。クロードイウス以外がこれを言ったのなら、すぐにでもエリオットはわたしと別行動を取っていただろう。それをしないのは、執着なのか。それとも。

「なにさ」

「ううん、なんでも」

不機嫌そうに睨まれた。どうやら思考の波にひたっているうちに、エリオットの顔を凝視していたようだ。あわてて視線をそらして、行き交うひとを眺めた。

しかしだ。これからどうしよう。

元の世界に帰るという選択肢は保留になっており、わたし自信もどうすれば最善なのかもうわからなくなっている。事態はなにひ

とつ進んでいないと捉えて良い。

成長したとはいえ、息子のそばにいたいと思う。でもここは別世界で、これまでのわたしの常識なんて通用しない。わたしの尺度でものを測ると痛い目を見ろということとは、エリオットの件で十分わかった。

脳裏にちらりと、腹黒く唇を歪める王子の姿が現れる。その瞬間、帰るか帰らないかの選択肢が一気に「帰りたい」に傾いた気がした。でもなにかを選ぶには、判断材料が足りなさすぎだと思う。

「ね、ねえエリオット」

「なに」

「あなたのこと、教えてもらえるかしら

「はあ？」

呆れたように中途半端にくちを開いて、エリオットはふり向いた。深い緑の瞳が、どんぐりのように大きくなっている。

ぎこちなく視線をそらして、ほほをかきながら私は言った。

「あなたと関わって一週間ちかく経つけれど、あなたのこと全然知らない。好きか嫌いかを判断するより前に、どんな人間かわたしは知らなすぎだと思ったのよ」

子どもらしくない、ひとを利用することや騙すことを優先的に考える性格だというのはわかってるが。

「ばっかみたい。ボクは別に話したくもないんだけど」

案の定、あっさりと拒否されてしまった。

「ひととひとが話し合えば、お互い理解できることができるはずー……なんて言うつもりでしょ」

ボクはあなたを理解したくもないから、する意味なんてないよね。エリオットはあざ笑う。

わかつてはいたが話を聞く姿勢にさえなってくれないことに、無性に悲しみを覚えた。それでもめげずに話しかけようとする。

「うわっ！」

エリオットが、ベンチから地面にたたき付けられた。きれいな衣

服が、砂埃で汚れた。尻餅をついたエリオットの前に、勇ましくも仁王立ちする小さな影。

「ママ!？」

いつも通りの、感情の読めない表情でエリオットを無言で見下している。

「お前、なにをするんだ!」

立ち上がって、詰め寄ろうとするエリオット。酷い罵声が口から飛びかかったが、それは故意に停止された。左頬を、丸めたこぶしで殴られることによって。

「な……なっ……っ!？」

あまりもの出来事に、殴られたほを抑えてエリオットはママを見る。それでもやられた分は、と殴り返そうとしていたがあっさりかわされてしまった。行き場のなくなった力は、エリオットを地面へと転落させた。

その隙をママは見逃さない。見事なはやさでエリオットに馬乗りになり、その襟首を引き上げ。

「せいかくわるい」

誰しもが思っていた言葉を言うのだった。

「そんなの、ボクの勝手だろう。その薄汚い手を離せよ、この売女」
「ちょ……ちょっと!」

子どもなのに、どうしてそんな言葉を。本当に6歳か、エリオット。それより、この状況をなんとかしないと。わたしは慌てて、ベンチから立ち上がってふたりを引き離そうとしたが。

「ばいた」

「な……なんだよ」

ママは無機質なひとみで、エリオットに言われた言葉を復唱していた。意味を噛みしめるように何回か言って、それから泣く寸前のような笑顔で。

「うん」

その瞬間、わたしの頭に衝撃が走る。外部から、頭に重くのしか

かる激痛。

わたしは、その場に前のめりに倒れた。ぐるぐると回る世界のなかで、歯をくいしばってその正体を視覚する。

「あなた……は」

見たことのない、大柄な男性。その手には、太く固そうな鉄の棒。それで殴られたのだとわかった。男性は肉厚な唇をゆがめて「おい」とマミを呼ぶ。

「……………」

マミは無言でエリオットの拘束をとき、彼の背中を足で蹴った。

「うごかないで」静かに言って、わたしは大柄な男性に片手で担ぎ上げられる。

「一体、どういうことなんだ。答えろ！」

状況の理解が追いつかないエリオットは、足蹴にされた屈辱もあるのかほほを真っ赤にして怒鳴るように叫ぶ。

「おいおい、威勢の良いガキ……だなっ」

「うぐっ！」

「エリ……オット……っ！」

焦点の定まらない意識のなかで男に蹴り上げられ、か細い悲鳴をあげるエリオットの名を必死で呼ぶ。助けないと。思い、身体を動かそうとしたが腕はほんのすこし上がるだけで終わる。

「エリオット……エリオット、エリオット……っ！」

地面に横たわり、動かないエリオット。

怪我をしているのでは。気が気ではいられなくなり、泣き出しそうになりながらも呼びかける。けれど幼い矮躯が動くことはない。さっと、血の気がひいてさらに名を呼ぼうとするが。

「うるせえ、だまりやがれ」

「ん……んんっ！」

口を無理に汗くさい手で封じられる。他の人間に助けを求めようと、視線を外野に向けた。でも。

（なんで……どうして、誰一人こちらを見ないの！？）

これが日常の一コマのように、道行くひとはただ己の行動だけを推進していた。罪悪感を浮かべた顔をしている人間もいたが、すぐに関係がないといったふうに目線を逸らしてしまう。

(どうして、こんな……っ！)

絶望が、はつきりと顔面に浮かんだのがわかった。生理的とは別の涙が、こぼれた。

「おい、行くぞ」

単調な声に、マミは頷いた。いつもの、無表情で。

「うん、おとうさん」

そう言った。

薄れる意識のなかで、ボロボロになった小さなエリオットに謝罪する。ごめんなさい、ごめんなさい、エリオット。

わたしの意識は、そこから暗黒へと落ちた。

小学1年生だった息子は仕事で城下町へと降り立った。(後書き)

またもや短いですが。

感想・突っ込みお待ちしております。

小学1年生だった息子は私情の怒りを宿していた。

健祐が報告を受け、急いで騎士団支部へとかけつけると、そこには焦燥の色を隠せないエリオットの姿があった。

あちこちに擦り傷や打撲があるようだったが、命に別状はないようだ。そのことに、少しだけ安心を覚えてから人払いをして、膝を突いて目線を合わせる。

彼は人形のようにイスに座っており、健祐の姿をようやく確認したというふうには、目線をゆっくりと上げると乾いた唇で。

「けん……すけ」

「……なにがあった」

健祐の受けた報告は、エリオットが騎士団支部へと傷だらけの姿で赴き、自分を呼んで欲しいと言ったということだけ。

具体的になにが起きたまではわからない。

ひとりきりという状況を考えれば、おおかた予想はできていたが。いつもの演技も忘れたように、エリオットは自らの身体を抱きしめ、震えながら。

「なん……で……」

言った。

「なんで、みんな助けられなかったの？ どうして、みんな見ていないふりをしていの？ あのひとが襲われて倒れたのに、どうして……」

仮面がはがれる。大人のために、向けていた仮面が。健祐はそれを、目を細めてみつめる。

「なんで……誰も、誰も助けられなかったの？ ひとを助けるのは騎士の仕事だとみな思っているのか？ ねえ、どうして。どうして、どうして！」

ひざをこぶしで叩き、叫んだ幼い時期国王。

その小さな背中を見て、哀れに思う。抱きしめ、怖かっただろう

と慰めてやりたい。でもそれ以上に、健祐はこの子どもにしくたはいけないことがある。

そんなことをできる立場に、彼はもういないのだから。

できるだけ、冷たく聞こえるように言い放つ。

「これが現実だ」

エリオットの肩が大きく一度、跳ね上がった。

「先の大乱後、シンフォニウス王国は安定した。しかしそれは平和という言葉と同一ではない。以前に比べて、ということだ。なにを意味しているのか、わかるだろう」

魔王に堕ちた国王も、横暴な貴族も、官も、大方は排除した。だが、それは腐った木の枝を切っただけにすぎない。根元は、活きているのだ。排除しないかぎり、それはどんどん新しい枝を結びつける。

「エリオット、お前は時期国王として知らないといけないんだ。それは、わかっているよな」

できるならば一生、この残酷な国内の現実を見せることなく安全な王城で生きていてほしい。自分達が経験した、あんなつらい目になんて会ってほしくない。

だが、それは許されない。

つらい現実を知ったからこそ、自分達は生き残れた。生ぬるい人生に浸かった国王など、すぐにでも堕ちてしまう。

いつかはたどるであろう未来だが、できるだけ後世にこの平和を引き継いでやらないといけない。

そのためにも、エリオットには知ってもらわないといけないのだ。

——人間としての苦悩を、君が背負ってくれる。迷い、嘆き、悲しみ、怒り、憎しみ、全ての感情と葛藤してくれる。だからこそ、私は苦悩することなく突き進めるのだよ。

ずいぶんむかしに言われた言葉を思い出す。

ならば。

やっていることは同じでも、オレは大いに苦悩しよう。

「お前たちが会っていた、ママ……と呼んでいた女の子がいるだろう。あの子、どうして白いスイセンなんか売っていたんだと思う？」
「どうしてって……」

花屋が立ち並ぶ、あの広場でわざわざ花を売る意味。

これは城下町のあの一歩でしか知られていない隠語のようなものだが、と前に言って。

「白い花はな“純潔”という意味がある。直接的な花言葉ではないが、どうということか……わかるだろ」

「まさか」

エリオットの顔がみるみるうちに青くなっていった。

賢い子だ。その賢さゆえに、つらい現実もやすやすと予想できてしまう。

「そんな、ボクは……なんてことを」

「あの子は、借金に埋もれた父親のために、文字通り身体を貼って生活を支えていたんだ」

あの幼い年齢ならば、つく客も少ない。来ても、どうしようもない変態ばかりだというのに。

「なら、どうしてあのひとはさらわれたの……」

あのひと、と聞いて気づかれぬよう唇をかんだ。健祐が気になった仕方がないその人物。本当ならば一番最初に彼女の安否を聞きたかった。健祐は感情を押し殺して、予測できる答えだけを発言する。
「娘の稼ぎだけじゃあどうにもならなかった父親は、人身売買に手を出したのだろう。近頃、この城下町で、誘拐がらみで報告が多々あがっていた」

この情報もようやくの思いで今日、調べてあがってきたものだった。

「娘から“勇者に似ている黒髪の女性”の話聞きだしたんだろうな。オレや彼女のような顔つきは、このあたりだと珍しい。黒髪、黒目もだ」

健祐に恨みを持っている人間は少なくない。身代わりとして、他

の黒髪黒目の人間にその暴力の矛先が向いているという情報もある。そして、生みの親である彼女の顔は……自分と、よく似ている。狙われるには、うってつけの獲物だ。

「なら、どうしてボクはさらわれなかったの」

「それはわからない」

エリオットの身元を知っていて、あえて手を出さなかった可能性もあるが。一概にそうとは言いきれない。

「でもどうして……みんな、誰も助けてくれなかったの」

「人身売買は国法によって禁じられている。なのに、どうして住民は黙認していたと思う？」

質問に、質問で返した。エリオットは、すぐにはっと顔をあげた。いくら絶望していても明瞭な頭脳は、無意識に思考して正しい答えを導き出すようだ。

「黙認しないといけないぐらい、生活が困窮していた……。もしくは、その一端を担って……た」

「そうだ。あの街のにぎやかさは、裏の金の上で成り立っている。汚い金でできた平和なんだ。不用意に討伐すると、直接関わってなくてもすぐに横倒しになる」

だからこそ、早く自立できるように産業発展に力を入れているんだがな。と付け足した。

しかしここで疑問が出てくる。討伐するわけにいかない組織を、健祐が追っていた理由。

彼女とエリオットに深く関わりそうだったというのもあるが、国として一度見つけた犯罪組織を見過ごすわけにはいかないのだ。不用意に全てを討伐すべきではないが、目に見えるものは国としてつぶさないといけない。

タケノコのように、次から次へと途切れることはないが。

「これがこの国の現状だ。わかったら、早く帰れ。ここから先は、大人の仕事だ」

あくまでも子どもであるエリオットの出番などない、と伝えるよ

うに言わないといけない。

本当はこんな状況から少しでも遠ざかったほしい、そういう健祐なりの優しさも混じってはいいたが。

クローディウスなら、討伐のその瞬間まで一緒に行動させていただろう。冷たく非常利な現実を、その幼い身体へとたたきつけるのだろう。

そこまでのことを、健祐はできない。自分の道徳が、否が応でも制止をかけるのだ。

だからこそ、ただ帰れとエリオットに言い放つ。

「帰るんだ。ここは、お前がいるところじゃない」

「……………っ！」

聞いた瞬間、エリオットは顔を伏せて部屋から出ていってしまう。狭い部屋でひとりになった健祐は、まだぬくもりの残るイスにそつと指をはわせる。

エリオットは強い子どもだ。

今はショックを隠しきれないとは思うが、時が経てば乗り越えられる。時期国王として成長する。これはただのきっかけ。エリオットが本当の意味で外の世界を知るための、きっかけにすぎない。

エリオットの成長のために自分の母親が利用されたことに対して怒りを覚えるが、いまはそれどころではない。

「母さん、はやく助けに行く。オレが、絶対に」

小学1年生だった息子は私情の怒りを宿していた。(後書き)

またもや短いですが。

感想・突っ込みお待ちしております。

小学1年生だった息子は王子に事の件を報告していた。

わたしが眠っていたのは、数時間ほどなのだと思う。

薄暗い明かりが脳裏を刺激して、薄く目を開くと高い窓から漏れる光が赤焼け色になっていた。

しばらく頭が回らなくてぼうつとしていたが、身体の様子が不調で身動きをするとうまく動けないことに気がついた。

冷たい床に頬をあて、両腕を後ろに回された常態でしばらくいられたのだ。どうやら自分は何者かによって捕らわれての身になっているらしい。

もう一度視線を上げて、周囲を見渡した。

そこは、もう使われていない食料の貯蔵庫のようだった。高い高い天井には小さな窓がひとつ。石でできた建物内は、地下のように冷たい。カビくさがが充満していて、ちいさな咳を繰り返す。

そして一気になにが起こったのか、思い出した。

「そうだ、わたしは」

エリオットと城下町へ降り、そこでマミと再会した。そして背後から知らない男に襲われて。マミはその男性のことを。

「お父さんって呼んでいたわ」

マミの父親がわたしをさらう理由はわからない。だけれども、その原因の一端をあの子が担っているのは確実だった。

この扱いからして、決して客人として招かれているわけではないだろう。

いや、それよりも。

「エリオットは無事だったのかしら」

彼がこの場にいないということは、さらわれてはいないのか。それとも、自分とは別の場所に捕らえられているのか。そんなことすらわからなく、唇を噛みしめるが今の自分にはなにもできない。た

だ、無事で城に戻っていることを祈っているしかない。

いまは、自分の身の安全を確認する方が先決だ。

「だれか」

わたしは精一杯、大きな声でひとを呼んだ。

「だれか」

わたしの声は石の壁に反響して、こだまとして鳴り響く。

「どうしよう」

誰もいない。

いたとしても、わたしの味方では決してない。

これからわたしは、自分がこれからどうなるかわからない不安に、さいなまれ続けるしかないのか。

冷たい床が、こだまする声が、一気に孤独を押し寄せる。

「大丈夫」

握った左手の拳に金属の感触をしっかりと感じて、自分に言い聞かせる。

なにがあっても、この指輪を心の支えとして生きてきた。そしてなんとかなってきた。

そうしてわたしはひとりの孤独に耐える。

体内時間では何日も。でも現実では数時間。窓から漏れる光が落ちて、暗くなってきた頃にひとりの男性が姿を現した。

「起きているか」

「……ええ」

彼は乱暴に粗末な銀食器を床に置いて「食事だ」と短く言って、立ち去ろうとする。

「まって」

「なんだ」

「これからわたしをどうするつもりなの」

それを聞いた男は、あざ笑うかのように鼻を低く鳴らす。

「身なりを見て薄々思っていたが。どうやらあんた、そうとう育ちが良いんだな。この状況でどうなる、だって？」

彼が靴の先が、わたしの顎をあげる。寝転がっているわたしと、立っている大柄の男。それだけで十分威圧的であり、恐怖が沸き起こりそうになる。

「黒髪に黒い目、なにより“勇者”に似ているその顔立ち。大事に大事にされて、これまで身の危険なんて感じたことがないのか？」

「どういうこと？」

「“勇者”に恨みを持っているやつなんて星の数ほどいるんだ。その憂さ晴らしを、他のなにかではらしたいと思うヤツは吐いて捨てるほどいる」

「つまり、わたしを売るのね」

「どうやらわたしは、お金のために身体もろとも売られることになっているようだ。」

「なんだ怖くないのか。それとも、根拠のない安全を信じているのか」

冷静に自分の状況を言い述べたわたしに、男は意外そうに言った。「怖いわよ。それよりも、聞きたいことがあるの」

わたしは指輪の感触を確かめる。これだけが、心の支え。震える体も声も、全てこの指輪が吸い取ってくれる。

「わたしと一緒にいた男の子はどうしたの？」

「ああ、あの身なりの良いガキか。あいつも売れそうだったな」
売れそう、という言葉に寒気が走る。

「はやく言って、どうなったの」

もったいつける男に、苛立ちがつのる。急かすように言うと、さも愉快そうに男は笑う。

「あいつは置いてきたさ」

「どうして」

置いてきた、ということは無事なのだろう。安心を覚えたが、その理由が不明だ。

「あのガキ、病気持ちなんだろう？ 余命いくつのガキをさらったって、金にならない」

(……え?)

取引先相手を騙して売っても良いが、それだとこれからの信頼に関わる、と彼は言う。

それはどうということだ。

わたしはそんなこと知らない。エリオットが黙っていたという可能性もあるが、とてもそんな風には見えない。それに、彼のその情報はどこから得たものなのだ。

「あの子のこと、誰から聞いたの」

「ああ? もちろん、決まっているだろう」

彼が聞いた話によると、エリオットは上級貴族の子どもで最後に外の世界を見たいという理由で、母親であるわたしと共に城下町へと降りていたのだという。

彼自身も遠目でわたしとエリオットの姿を確認して、その身なりと教養の高さを認めてその話を信じたようだった。

その人物の名前に、わたしは聞き覚えがなかった。

けれども、知っている人物だった。

「مام……」

彼女は明らかにウソをついた。

父親である、目の前の男に対して。

どうして。

مامがなにをしたいのか、わたしには全くわからない。

わたしの誘拐を手引きしたのは間違いなく、あの子だ。でもエリオットを巻き込まないようにしたのも、あの子。

どうということだ。

わたしが答えにたどり着かない疑問に思考を巡らしていると、男は「これで話は済んだだろう」と背中を向けた。

「お前は明日の朝、取引先に持っていく。悪く思うなよ、生活のためだ」

「……そう」

けれども、それも考えるだけ無駄なのかもしれない。

冷たい石の床に意識を向け、男の背中を見送りながら、思う。

あの広場で襲われたとき、わたしたちの騒ぎを見て静止をかけるものなどひとりもいなかった。なら、それが当たり前の風景だと皆捉えていると考えた方が有力だろう。

ああも安定していたと思われたこの国は、裏ではこういうことが行われていた。

異世界でも、元いた世界でも行われることはほとんど同じというところか。夢物語の世界ではなかったのだと知って、むしろどこか安心を覚える。

その矛先が、自分に向いただけ。

これからわたしは、どこかへと売られていくのだから。

「でも……な……」

誰か、助けてくれるだろうか。

「健祐なら探してくれそうだけど……。クロードイウスだったら、笑っちゃうわね」

婚姻を申し込まれたとはいえ、彼からは愛情なんて一欠片も感じない。そんな王子が、たかが異世界の女性のために重い腰を上げるとは到底思えない。なにかしても、騎士団に搜索させるとかその程度だろう。

「まあ……いいか」

考えても仕方がない。わたしは目を閉じて、眠ることにした。指輪の感触だけが、しっかりと心を支えていた。

小学1年生だった息子は王子に事の件を報告していた。(後書き)

感想・突っ込みお待ちしております。

小学1年生だった息子は貴重な証言を得ていた。

エリオットはあの後、城へと戻りいつもどおり夕食を終えて自室で本を読んでいた。

だが文字を追うだけで、中身が頭に入ってこない。気が付くと、同じ行を何度も何度も繰り返して呼んでいた。

落ち着かない。

舌打ちをして、本を机へと投げやる。細々とした明かりを見つめて、今日起きたことを思い出す。

「……なんで」

彼女がさらわれてから、何事も集中できない。こんな生産性のないことはただちに中止して、早くクロードゥスのためになることをしなくてはいけないのに。

雑音のように思考が邪魔をして、身が入らないのだ。

「とは言っても、子どものボクにできることなんてなにもない」

ごろりと、ベッドの上に身を投げ入れて天井を見上げる。横に転がって、はたと目を瞬いた。

「なんでボクがあひつを助けようとか思ってるんだよ」

迷惑なお節介を焼いて、煩わしいことこのうえないあの女。ついには「あなたのことを教えてほしい」なんて言い出して。きれい事ばかり述べているあの女……。

「きれい事……？」

いや、彼女はきれい事なんて言っていない。ただ謝りに来て、冷静に物事を判断して自分に述べた。それから、好きか嫌いかどうか判断するために自分のことを教えて欲しいと。

「……なにほだされようとしてんだ、ボク」

思考を放棄して、そう呟いた。それが無性に苛つく。

こんなにも自分が揺るがされるなんて、思いもしなかった。

「ああ、苛つく。腹立つ、どうしてこんな」

ベッドから起きあがり、上着を羽織る。

なにも考えていなかった。

なにも考えていなかったが、身体は勝手に考えて勝手に動く。

部屋から人払いをはしてあるが、部屋の外には警備の人間がいる。エリオットはそられを呼びつけて「城内を散歩してくるから、ついてこないでね」と言って、歩き出した。

それでも警備のために後ろをついてくる騎士達を気にしながら、クロエの部屋へと向かう。エリオットの行き先に気づくと、騎士たちはきびすを返して自らの業務へと戻っていった。

それを確認すると、エリオットは素早く地下通路を目指して歩く。

目指す場所はイス・タウン。

ここ最近ですっかり行き慣れてしまった道を、明かりなしでひとり進む。誰かが見張りにきたときに、気づかれる恐れがあるからだ。暗闇しかないが分かれ道など一切無い道だから、迷う心配がないのが幸いだ。

歩きながら、エリオットは自分の行動に戸惑いを覚えていた。

これまでエリオットは自ら城を抜け出すなんてしたことがない。

次期国王が真夜中に城を抜け出す行動が一大事なのは、重々承知していた。この行動は大切なクローディウスに心配や迷惑がかかると、なによりも自分でわかっていた。

なのに、歩かずにはいられない。

この心のわだかまりを晴らしたい一身で、エリオットは歩く。

そして――あの噴水の前へと来ていた。

朝や昼間の賑やかさがウソのように、そこは静寂に包まれている。噴水も止まっていて、小さな音を鳴らしただけでも遠くまでこだまする。

彼女とふたりで座ったベンチに腰掛け、いくつもの夜空の星を見上げた。それは無意識の行動だったが、エリオットの隣は空いていた。まるで、誰かが座るのを待っているように。

それからしばらくぼうっとしていたが、その行為の虚しさに気づいて苛立つように吐き捨てる。

「別に、ボクがこうしたってあのひとは助かるわけじゃないのに」
国王になるエリオットが今できることは国の現状を受け入れ、目にやきつけること。今現在の国の常態を詳細に感じて、未来のための糧とすること。

こんな場所でぼうっと座っているなんて、意味がないことこの上ない。

それでも、なにかせずには居られない。

「わけわからない……」

それからまた、しばらく夜空を眺めていた。

冷たい風がほほをなでて、静寂にも慣れてきた頃に視線を地面へと落とす。

こんなことをしても意味がない。ようやく、そう思えて「……帰ろう」エリオットは、ベンチから立ち上がった。

今頃、王城では自分がいないことによって、騒ぎが起きているかもしれない。

けれども、エリオットの足はそこで止まることになる。

スイセンの花が風にのって、舞い上がる。花卉が、エリオットの足下へと落ちた。

「……おまえ」

「……………」

粗末な服。バスケットの中の、白いスイセンの花。表情というものを感ぜせない、顔。

「なんでここに」

そこにいたのは、マミ。

彼女の誘拐を手引きしたはずの少女が、どうしてここに。

エリオットの欺瞞の視線に対して、マミは無表情に答える。

「あなたこそ、どうしてここにいるの」

そう言って、一歩彼女は踏み出す。その威圧的な足踏みに、どこ

か怖じ気づいてしまう。自らのプライドにかけて、それを表に出すことはなかったが、彼女を睨みつけることによって、実質如実に現れていた。

「あのひとをたすけにきたの？」

「……別に」

「ならどうしてここにいるの？」

「それは」

「きて」

言葉少なく、言葉短くマミはエリオットに手を伸ばす。

どういうつもりだ。ますますワケがわからないエリオットは、一歩大きく踏み出して言った。

「お前は、あのひとをさらったんだろう。どうしてそんな悪人に、ボクがついていけないといけないんだ」

マミはなにも言わない。無言で、エリオットを睨みつけているだけ。それに無性に苛立ちを感じて、威圧するようにエリオットは怒鳴る。

「なにか言えよ！」

それでもマミは表情ひとつ動かさない。ただただ、硝子玉のような瞳で見つめているだけ。それから、目をすっと細めて彼女は言った。

差し出していた手はそのまま。

「あのひとがさわれたことが少しでもいやなら、きょうりよくして」
「答えになっていないぞ」

初めて聞く長い言葉は、エリオットにとって理解に苦しむものだった。

「わたしは」

それがかまわず、マミは続ける。

「おとうさんがすき。でもそれとどうじに、あのひともすき。……おかあさん、みたいだった」

マミは語る。物心がついた頃には、母はいなかった。父がどこか

の女性に生ませた子どもだったこと。だから母親というものは知らないこと。

「ほかのひとのおうちやひろばでみる、おかあさんみたいだった」
身体で商売をしている自分は、周囲の人間に嫌われていること。
知らなかったとはいえ、何の先入観もなく優しく話しかけてくれたこと。

「うれしかった」

「……それは、お前の基準だろ」

それはマミの価値だ。マミは優しくされたことがないから、優しくされると犬のように懐くのだ。だが自分は違う。優しくされるが、その行動には心がない。

エリオットの背後にあるきらびやかな富や権力といったものに魅了されて、集まる蛾のようなものだ。そんなものに対して、好く人間などいるものか。

それを言うと、マミはうなづいた。

「うん。わたしとあなたはちがう」

「言っている意味がわからない」

「でもけっこうとして、あなたもあのひとのことが好きなんでしょう？」

「な……」

マミの発言に耳を疑った。どうしていきなりそういうことになるのだ。

「ばっかじゃないの？ どうしてボクが」

「ならどうしてここにいろの？」

今度こそエリオットは、押し黙った。反論する術が、言葉が思いつかない。

「それは」

「きにしていないなら、ここにいない」

口調は静かだが、畳みかけるようにマミは言う。

「あなたがあのひとのことがきになるのなら、たすけるきょうりょ

くをしてほしい」

そうしてもう一度、先ほどの台詞を伝えた。

「……誘拐を手引きした人間がそういうなんて、なにかたくらみがあるようにしか思えない」

「わたしはおとうさんがすき」

マミはまた、同じ言葉を繰り返す。

「おとうさんがいけないことをしているのをとめたい。でもとめられない。だから」

「……………」

彼女の言っていることは酷く抽象的で、拙い内容だ。でもエリオットには、なんとなくわかった。そして容易に彼女と同じ立場の自分が想像できた。

自分だって、父であるクロードイウスが間違っているのであれば止めさせたい。でもそれ以上に、エリオットら子どもにとって親というのは逆らえない絶対の存在である。そして、いつまでも傍にいたい存在でもある。

親には逆らえない。でも、大事なひとを助けたい。

ならば、たどり着く答えはひとつしかないだろう。

「それは、お前の父親にとって裏切りとしか思われないよ」

「わかってる」

マミは凜として答える。

「きしだんに、おとうさんがつかまるわけにはいかない。でもあのひとはたすける」

マミは説明する。彼女の身柄の取引は、明け方にありその瞬間を狙って助け出すしかない。いま現在、彼女は使われていない貯蔵庫で拘束されている。入り口はひとつしかなく、気づかれずに潜入するなど不可能に近いと。

「あなたのちからがひとつようなの。あのひとを、わたしをたすけて」
「……嫌だよ」

エリオットは、床を睨んで吐き捨てる。

「でも」

差し出された、マミの手をにぎる。

「この国にいる以上、どんな煩わしくて腹立たしくてお節介でも…ボクの民だ。全ての国民には平等にしなくてはいけないけど、目の前で誘拐されて知らないふりをするほどボクは落ちぶれていない。…やってやるよ」

言い訳がましく長々と言ったエリオットに、マミは苦笑する。それは初めて見る、マミの心からの笑顔に感じた。

「すなおじゃない」

「うるさい」

「つんでれ？」

「うるさいって言ってるだろ」

そう言い合い、手を繋ぎながら幼いふたつの影は街灯に照らされる。

角度が違って移った影は、ひとりの大きな人影に見えた。

小学1年生だった息子は貴重な証言を得ていた。（後書き）

クリスマスに小説を書いている時点で、どんな生活をしているか予想できる今日この頃。

感想、突っ込みお待ちしております。

小学1年生だった息子はほりくさい思いをしていた。

マミはエリオットを明朝取引がある場所へと案内した。

そこはどこにでもあるような、やや広めの路地裏にあるちいさな扉。その中にある部屋に売る人間を連れてきて、取引をするために作られた場所だった。

万が一、人間が逃げてもここは一本道な上、道が入り組んでいて道を知っている人間でないとたやすく迷う。

この辺りには人もあまり住んでいない。どこまでも、商売をする人間にとって都合の良い場所であったのだ。

「それで君、作戦とか決まっているの？」

この場所を取り返すとマミは言っていたが、この地理だ。相手はここを熟知しているし、力のある大人だ。卑下するわけではないが、圧倒的に力の差がある相手に対して覆せるだけの策はないといけない。

すっかりいつもの無表情に戻ってしまっているマミは、近くににある金属の棒を手にしてエリオットの前につきだした。

「ちよっと、まさか君が突撃してその隙にボクが助けろとかそういうこと？」

あまりにも無謀というか考え無しの作戦で信じたくはなかったが、マミは自信満々な顔で縦に首をふってしまふ。

エリオットはそんな無謀な作戦に自分を巻き込もうとしていたのかと、まんまと彼女の言葉に乗せられてノコノコ来てしまった自分を恥じた。

「君、バカでしょ。取引現場には何人大人がいるかなんてわからないし、油断させて不意打ちするならまだしも……真っ向勝負で君に勝ち目なんかないじゃないか」

「やってみないとわからない」

「どうしてそこで根拠もなく自信満々なんだよ。ともかく、却下。もう少し理知的な作戦にするよ」

マミは見かけによらず、単純というか直接的な思考の持ち主のようだ。こいつに任せたら危ない。エリオットはそう思い、周囲の地理や用意できる道具などをマミに聞く。

「ねえ、どうしてこの建物の床は高いの？」

取引現場の建物は、太い棒のような支えがいくつもあり地面と建物に間が生じていた。普通の市民の家であれば、このような隙間はあまり見かけない。

「ねずみ」

「ああ、なるほど」

つまり、鼠が入らないように床と地面が離れているのだ。

恐らくここは元々食料の貯蔵庫だったのだ。国が荒れていた時期に一部の市民が食料を保存するために使用していたのだろう。国が安定したいまとなっては、食料の貯蔵はほとんど国が管理しているから意味をなさない場所となってお払い箱となったわけか。

「ボクたちなら、床下の隙間に入れそうだね。ねえマミ、室内はどうなっているのかわかる？」

頷いたマミは、指で地面に絵を描き始める。

「マミ、今現在なかには誰もいないんだよね」

ほぼ確信に似た問いで、マミからの否定もなかった。

「はいれない」

ここへはいるための鍵をマミは持っていない。そのことはエリオットも予想していたので、特に驚くこともなかった。

先ほどみつけた床下を見つめながら、エリオットは言った。

「この場所は侵入は容易だけれども、逃げ出すことが難しい。奪取に必要なのは素早い行動と、計画され尽くした逃亡経路。つまり、計画。さて、床下に入るなんて汚れことをするのはすごく嫌だけど……勝利のためなら仕方がない」

エリオットは迷うことなく床下へと身を滑り込ませる。地面に手

足をはいつくばらせるなど屈辱的な行為をさせたあの女性には、帰ったらそれなりのお礼をしてもらわないといけないな、と考えていた。

ほこりくさい床下の中で、マミに案内を頼む。

マミは一枚の床板を身長に外すと、室内へと入っていった。エリオットもそれに続く。

むかしは倉庫であった場所は、いまや壊れたガラクタ置き場となっている。万が一、誰かがここに侵入しても金目のものなどないから自然と人が寄ってこなくなるのも納得がいった。

「庶民はこんな薄汚れた場所で暮らしているなんて考えると、不憫に思うよ」

思わずそう一人でつぶやくと。

「おかねもちはきれいな場所でしかせいかつしていないなんて、とてもふびん」

エリオットの言葉に反応して、マミが言った。

「……ボク、君がとても嫌いだ」

「だいじょうぶ、わたしもきらい」

親指を突き立て、凛々しく宣言するマミにエリオットは深いため息を吐いた。

「……もういいよ。とにかく、準備するよ。日が昇るまで時間がな
いんだ」

「うん」

元の世界でも、他の国で人間が売られていることは知っていた。

こちらの世界でも、こういうことが行われると知った。

文化や発展が違うだけで、人間なのだから行うことは同じ。それはあちらもこちらが変わりはしない。

この場所に捕らわれて、ようやくそう思った。

少し前に、クローディウスと似たような会話をしていたのを思い出す。

私はエリオットの王として歩む未来に怒りを覚えた。でもエリオットはわけもわからず受け入れていたのではなく、自分で考えて自分の将来を受け入れていた。

それは、何もこちらの世界だったからではないだろう。でもそれは、見当違いのことだったのだ。

わたしは私の元で成長するはずだった健祐を奪った現実に怒りを覚えていたのであって、この世界を恨むべきではなかった。

わたしのいた世界でも、そんな不条理で理不尽なことなど吐いて捨てるほどあるのだから。

夫が、死んだように。

「起きろ」

冷たい床と、冷たい声の感触を第一に感じた。

「あ……」

急に浮遊感がした。からだは床から離れる。無理に立ち上がせられて私の意識は覚醒させられた。

どうやらわたしは、白昼夢を見ていたようである。

意識していなくても、この捕らわれたの状態というのはストレスを感じるようで一気に気怠さが私を襲った。それがあまりにも急だったせいか、ふらついてその場に転んでしまう。

「さっさと立ち上がれ！」

力強い足に腹部を蹴られ、その衝撃に咳き込んだ。

その場にうづくまるように身を丸くしたわたしは、反射的に指輪をすりつくように握りしめていた。

それがいけなかったのか。

男はその私の様子を見て、嫌らしく笑った。

私の左手を取ると、指にはめてある指輪をねっとりとした目線で見

た。

「何を大事そうに持っているんだ」

「……やめてっ!」

喉から悲鳴のような声が出てきた。そのわたしの必死の形相に、男はさらに愉快そうにして。

「なんだ、これがそんなに大事なもののなか。安っぽい指輪にしか見えないが」

「いいから、離して!」

「それは出来ない相談だな。……まあ、安っぽい指輪でも金になるなら預かってやる」

太い指が私の指先へと伸びて、指輪が抜き取られてしまう。

「いや……いやよ。やめて、やめてったら……っ!」

お願いだから。最後には懇願するように、男に頼み込んでいた。

それが男をさらに愉快にしたのか、男は天井高い窓を見上げてから私を見下して。

「ここに連れてきたとき、お前泣きも叫びもしなかったよなあ?

扱いは楽だが、気に入くわねえ。だけどよお、この指輪に触れたらこの有様だ。どれだけ心の支えだったんだろうなあ……?」

その口調に、嫌な予感がした。けれどもあらがう術も力もない。

絶望的な結果だけが、わたしに突き刺さる。

「だめ……やめて」

でもその願いは無慈悲にも、聞き入られることはなかった。

「そんなに大事なら、捨ててやるよ!」

そうして、大きく振りかぶり高い高い天井に銀色の指輪が。

そこから先の記憶ははっきりとしていない。

あの瞬間、悲鳴を上げたのかも絶句したのかもわからない。

とにかく滅茶苦茶に暴れて、何か睡眠薬のようなものを口に当てられて眠らされたのだけは覚えていた。

だからまた目が覚めたときには、大勢の男達に囲まれていた。

両手両足が縛られている状態は変わらなかったが、今度はイスに

座らされて固定されていた。

指輪を捨てられたショックが抜けきれず、ぼんやりとその男たちを見上げる。

「こいつが今回の女か」

「ええ、どうですか。勇者に似ているでしょう？」

「そうだな。それにまあまあの外見だ。変態に良い値で売れるだろう」

「では、買っていただけますかな？」

「ああ。いいだろう。受け取れ」

背の高い男が、私を連れてきた男に小袋を投げつけた。その重量のある感じと音とで、お金なのだと悟る。

実質目の前で金銭の受け渡しが行われているところ見て、これまで指輪によって押さえつけていた恐怖が沸き上がってきた。

逃げたい。

しかし、身体はしっかりと縛られているしこの場には6人ほどの男達が控えている。女一人にこの大所帯はやりすぎだとも思うが、どう考えても容易く逃げられる状態ではないことは明白だ。

「勇者と言え。最近、勇者がオレたちをかきまわっているという噂は聞いているか」

背の高い男が言った。

いつもはあまりこの街に來ない勇者が最近になって活動が活発になり、次々と同業者が拘束されて行っている。

だが商売を一時的にでも辞めることはできないから、警戒する意味を込めて大人数で取引現場に詰め寄っているということ。

先ほど抱いた疑問はこれで解決されたわけである。

最近になって動きが活発になったということは、もしかしたらエリオットとわたしが買い物へと出かけたせいなのかもしれない。あの子は心配性だから。

そこまで考えて、天井が不自然にきしんだ音がした。

「……ん？」

男たちもそれに気づいたようで上を見上げる。その全身から、緊張が走ったのはわたしにもわかった。

「誰かいるのか」

声を張り上げじりじりと歩む。

しかしすぐに、か細い動物の鳴き声が聞こえてきた。

「ねずみか」

そうして安堵のため息を全員がこぼした。それから再び商談を始めようとした矢先、ひとりの男の足が床へと沈んだ。

「うわあっ！」

「どうした」

「す……すみません、いきなり床が抜けて……」

「そうか。この建物は古いからな。気をつけろ」

「うっす」

返事をして、ヒゲの濃い男が不思議そうに沈んだ足を戻そうとしたが。

「うわっ！」

またもや、その足は床下へと引きずられる。

背の高い男は苛立ちを含めた声で、叱咤した。

「いい加減にしろ。そう騒がれては、落ち着いて商談ができないじゃないか」

「す……すみませ……」

そう言いかけたとき、今度は別の男の叫び声が響く。それは連鎖的に続き、わたしはこの事態が自然に発生したものではないと悟る。

「これは一体……」

そう呟いたとき、突然手足を拘束していた圧迫感が消えた。

「え……？」

わたしを誘拐した男たちではない。彼らはいま目の前で起こっている異形の時代に、狼狽えている。

だったら、誰が。

「――迎えにきたよ」

聞き覚えるのある声が、凜と耳にはいつてくる。

「あなた……」

金色の髪、そこからのぞく精悍な瞳。幼い身体には、小ぶりのナイフが握られていた。

「エリオット」

「逃げるよ、はやく」

エリオットは、わたしの手をとって走り出した。

小学1年生だった息子はほこりくさい思いをしていた。(後書き)

突っ込み・感想お待ちしております。

子ども組ががんばるお話し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1109x/>

小学1年生の息子が、家を出た瞬間25歳の立派な勇者になって帰ってきた。

2012年1月8日01時08分発行